WASON
HQ
1104
J74+

Dec. 1897
no. 456

明治三十年十二月廿五日

女學雜誌

第四百五十六號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百五十六號目次

◎社説

女學一年の回顧　鷗村

◎評論

大悟の辨

◎女學

主婦の自殺　曲浦

滔々たる天下其妻を殺すの男子多し　かもしめ

女學校の紀念日

各地工女の狀態(二)

幼兒健康の狀態

◎教育

教育家の獨立　長汀

米國に於ける白知教育の現況◎エルウイン白知學校の景況◎官學的教育家◎湯武居士に質す(投書)◎氣質鍛練に關する調査

◎隨感

明治三十年

南遊行(舟航人生に似たり◎意中の文、日頭の吟◎交通は同情なり◎吏德何かあらん◎支那人◎歲暮文虫子を追ふ)

◎雜錄

右大臣實朝　おうそむ

鐵山雜詠　巖本學城

◎時文

女子教育論纂◎女子教育要言◎福澤全集緒言◎普通看病學◎新著月刊第十號

◎片々◎時報

明治三十年度女學雜誌總目錄

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際的事にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	壹册　價金拾錢 半年　前金　金一圓拾錢 一年　前金　金貳圓 (內國無郵稅)	代金は凡て前金の事◎前金切れの節は封皮の捺印に御注意ノ上早速御送金有るべし
廣告料	一行　一回(廿七字詰)前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引	
送金	爲替は東京本郷駒込郵便支局に宛て小爲替にすべし(郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし	

明治廿七年二月十九日內務省許可

明治三十年十二月二十八日印刷

明治三十年十二月二十九日發行

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚六百六十番地

發行兼編輯者　巖本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地

印刷者　島保藏

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地

發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場(電話本局十九番)

第四百五十五號目次

◎口繪

角筈衛生園の景

◎社説

冬天亦花影なし

◎家庭

家政にも亦術数をゆるさず◎冬の朝の床ばなれ

主婦外に出でゝ働くべき乎　長汀

家政の工夫(裁縫の工夫◎料理の工夫◎万般の工夫)◎留守中の電信と郵便◎角筈衛生園◎犯罪に於ける家庭教育の影響

◎講義

兒童の神學思想　久津見息忠

◎文藝

文武逢迫談　曲浦

◎兒籃

二人の朋友　さくら子

◎隨感

人互に羨む◎愛の神秘◎人生これ賽の河原◎さみしき妻に告ぐ◎天地各樣の景色

◎雜錄

靜?動?　馬陵

婦人の外交家　岡田竹澳

我が日の本(歌)　しなん

歸鄉雜賦　巖本學城

◎時文

胃頓◎幕末三傑◎刑罰及犯罪豫防論◎七本櫻◎深山の美人◎西洋娘氣質

◎片々◎時報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生義臺灣旅行中に有之就ては歳末年始の御禮を欠ぎ申段以紙上奉謝候

巖本善治

女學雑誌編輯上の用向並に雑誌及書籍等寄贈の節は必ず左の名宛にて御差出し被下度候

東京麴町區下六番町六番地

櫻井彦一郎（鷗村）

新著月刊

第二年第一卷　一月三日發行

新年大附錄付

口繪は富岡永洗筆木版極彩色新春門遊ひ之圖●六版「コロタイプ」裸躰畫ニ圖菊左等十餘名俳優肖像●其他美術寫眞數葉

●新作小説

◎羽ぬけ鳥　廣津柳浪

◎てまへ惚　伊原青々園

◎ひな歌　小杉天外

●大附錄

◎神經性の二大別　坪内逍遙

◎月かさ日かさ　島村抱月

「社會欄」「文壇欄」「梨園欄」「雜錄欄」等着意いよいよ嶄新觀察いよいよ精覈

第一回懸賞募集

●詩●歌●俳句●川柳●俗謠●

定價（本號に限り）金廿五錢　郵稅三錢

臨時增刊

第二年第二卷　一月五日發行

定價廿五錢　郵稅三錢

後藤宙外著

思ひざめ

●口繪は富岡永洗筆木版極彩色美人と白蓮の圖及美麗寫眞版數葉

●本篇は著者か空前の長篇にして一年間餘の意匠を費したる得意の作なり其從來の諸作と選を殊にするは勿論なり卷中詩人哲學者あり藝者園物あり當世女子あり女房あり女敎師あり老賈人ありて趣味豐富文字流麗讀去讀來卷を措くに堪へず

●「社會欄」以下奇は益々奇に妙は益々妙なり

發行所　神田區今川小路二丁目（電話本局六九二）　**東華堂**

社會學社會問題及社會政策之評論

日本宗教合併
社會雜誌

每月一回刊
十二月發兌
第八號要目

＝社說＝落閥打破と責任内閣●現今の内憂外患●國際道德●歲晚の辭

＝雜纂＝家庭教育と犯罪との關係（原胤昭）新經濟式（ガルスト）國家經濟と社會主義●婦女勞働の保護法●壯丁勞働の保護法●工場條例時論●社會心理學（山形東根）監獄視察記（生江孝之）

＝觀勢＝各地方に於ける細民救濟の方法●如何なる物か細民の食●貧民增加と犯罪及風紀●小作人の紛擾及要求●慈善業者の困難●人種競爭●職工名簿と職工證●鐵工組合の成立

＝教界＝苦樂之解（青柳猛）淫祠順禮（十五個社寺に於ける參詣人數經歷等を精究したる長文にして下等社會の宗教位置一目瞭然）（八濱德三郎）膠州灣事件と宗教界の時論●社會崇拜（東根）日本主義の本領●宗教の名實●神々と供物との關係●貧民窟の宗教事情●新刊紹介

◎宗教論壇　◎社會論壇

發賣元　東京麴町區下六番町六番地　社會雜誌販賣所

大賣捌　東京堂●東海堂●北隆館●上田屋

日本の家庭

每月一回（十五日）發行●一冊價金六錢●（半ケ年分六冊）代金三拾六錢●一ケ年分（十二冊）代金七拾錢●總て郵稅なし●爲替振込牛込局

十二月十五日發行

第三卷第六號

口繪　家庭團欒の挿繪十餘

社說　嗚呼丁酉の歲將に暮んとす訪問　三論

田眞佐子女史○史傳（續）ポッカホンタス女

貞婦お政：東水生

論：星川清成●面白誌（續）：經營生●

集長歌俗解：蕣天●

つめ草：營生あ

雜報●和歌●俳句●新刊紹介

小說　うてぬ緣（完）不二山人

敎育　雨夜の友：秋山角彌●敎育勅語童

家事●夫婦喧嘩：心適生

だいどろ料理法

雜錄　萬葉

米國通信欄　社員渡米後の詳細なる通信を載せり

發行所　東京牛込區新小川町二丁目四番地　日本の家庭社

●切拔通信之要旨

●切拔通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨俱樂部敎育宗敎歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上に掲載の作は小說廣告に至るまで其委托に應し精閱遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

●切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は一ケ月金貳拾錢とす●一事業又は一事物に止まる通信は一ケ月金參拾錢より五拾錢まで●會社又は一團躰の全般に關する通信は壹ケ月金五拾錢より壹圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多からるものは臨機の契約を爲すことあるべし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

東京市京橋區釆女町廿一番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百五拾六號

明治三十年十二月廿五日發兌

社説

女學一年の回顧

烏兎匆々、歳月は流るゝが如しと、日々に思ひ煩へども、光陰の過ぐるとは、人の心の忙しきよりも忙はしく、人々は、昨日かも新玉の春をむかへし心地すなるに、早くも明治三十年も暮るゝ日となりぬとて、いたく喞つめり。

吾人は年々の暮に逢ふごとに、一歳空しく過ぎぬ、三百有餘日遂に一事を成就したるとなしと嘆ずるものなり。されどこの一歳時や、春風秋雨、百歳其序を變へずして來去し、花開き、實結び、青葉に茂りし梢、紅葉の色をかさね、鳥雛幾度か孵化し、獸子既に長け、變化頗る多きの天地に處して、山川と共に、黄道一旋轉の齢を重ねたるもの、熟ら回顧すれば、此年に於るも、また多事に遭逢せざりしとせんや。試みに日記を繙いて、元旦、歳賀の往復を始めとして、一年の我を繰返し見よ。喜ぶべきとのありき、恥づべきとのありき、憂ふべき事のありき、悲しむべきとのありき。大事ありき、小事ありき。今歳は實に多事忙々の間に過ぎ去りしと、誰か今更の感慨を抱かざらんや。

無爲に似たるの今歳は、蓋し多事の年月なりしと、人の私に於てすらなほ其然るを覺るべきに、況んや、一國、一社會に於てをや。社會の一年は、其歴史の一期をなす、其多事を閲するや、いふを待たざれども、なほ一番回顧すれば、思ひしよりも更に多事なりしに驚かんとす。

然るに、今夫れ、政治界、實業界の如きに至りては、これが一年の回顧史を編せんものは、變移紛雜の多々たる事件を以て煩はさるべく、傍人も亦其當に然るべきを知る。而して爰に我女學界の如き、人多くは其初めよりして、無事太平、變移擧ぐるに足るものなしと速了せるものなり。素より女學

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

界の事故、彼前者の煩雜糺紛せる如きに似ずして、單純簡少なりと雖も、試みに其一歳間の事跡を回顧し來らば、人々必ずや思ひ其半ばに過ぎざるを知るものあらん。女學界の變遷事故些少なりとするも、其社會人心に影響するとや、凡人多くは悟らずして而も頗る大なるものあり。殊に明治三十年の女學界は、此歳の困迫不景氣なりしに拘らず、前二三年以來の積勢の約する處、女子教育の頓に振作し來るありて、女風變遷の趨勢、著しく現はれ來りたるあり、斯界實に事尠からざるの日月を經たり。

歳やうやく改まり、人々相慶して、新年せし程もあらず、一月十一日と申すに、國民の御太母と仰ぎまつりける、掛卷くも畏き故　英照皇太后陛下俄に御登遐ましく〳〵て、諒闇のやみに、くれまどひしが中にも、陛下、世に在しますの日、青山御所の大宮にて、親ら園藝、養蠶の民の業を、勉めましまして、をさく〳〵怠り給はざりしとなどの、難有き御懿德の、新聞雜誌などに傳はりて、之を承はり及びたる、臣民の家庭は、主婦たるもの丶、必ずや、少くとも勤儉の躬行を一層感得せしものあらん。

成瀨仁藏氏は、既に昨年以來、諸大臣はじめ、有志の贊成を得て、大坂に於て　我國未曾有の女子大學を創設するの企ありしが、今年に入りては、計畫いよ〳〵熟して、遂に三月下旬帝國ホテルに内閣大臣及貴衆兩院議員を招待しての、創設披露會となり、つゞいて大阪に於けるの同會となりたり。此等の會合席上の演說の、女子教育演說及女子教育談の二會に綜合せられたるは、蓋し明治三十年の時世は、貴顯名士の多數をして、雙手を擧げて、女子高等專門教育を贊成せしめ、女子大學の創設に一臂の助力を約束せしめたるとを證するの、後日の左劵なりといふべし。而して又世上多くは、此擧に贊成せるもの丶如く、會々一二の偏狹なる國家論者流と、害心ある毒筆家との、之に反對するものありしも、其淺薄の議論、人の注意を値ひするものなし。此女子大學の實設は、未だ日を期して待つべからずと雖も、吾人はその數年にして必ず成るとあらんを信ぜり。

女子大學の創設運動一たび大小諸新聞等によりて江湖に喧傳せらる丶や、近年の女子教育振作熱に炬火を投じたるが如く、これまでは餘りに無頓着なりし地方の新聞紙中にも、往々高

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

等女子教育論を賛議するものあるに至る、凡そ今年の女子教育論の盛んなりしとは、數年來の異觀なりといふべく、數種の女學書類の發兌せられしあり、又一二の婦人雜誌新に出づるあり、歲末に及んで「女子教育論纂」なるもの、公版せられしを見ても、亦多少、時流を察すべし。また智慧あり、教育ある家庭を要求するの聲、諸處に聞え、小新聞紙面に家庭談を掲載する等の事あるに至る。九月以降、女子高等師範學校内に家事專修科の新設せられしも、また之時勢の然らしめし處なり。

而して又小學女兒就學奬勵問題は、各地方にて盛んに研究せられて、其結果もあるべしと雖も、多くは時世の運行によりて、小學女生徒の數、本年に入りて、增加するを見たり。この趨勢たる、國運の進步と共に、層一層の增大をなすべきや論を待たず。

小學女兒就學奬勵をいふものは、また多くは、高等女學校の必要をいへり。世上高等女學校の必要を說くことは、近年の女子教育作振說の骨髓にして、吾黨が屈指三年以前に、高等女學校全盛の時代來らんとすと唱へたる以來、時世の向ふ處、人力はたゞに、これを扶持するに止まりて、實に今年後の三四年間を一期として、其全盛時代は來りたり。新春以後、鶴岡仙臺、名古屋等の三四ヶ處に新設の高等女學校あり、また數多の市町會、縣會等にて其新設を決議して、來年に入りていよ〳〵開校せらるべきもの、一二にして止まらざるべし。其新設案の公衆代議會に提出せらるゝや、極少數の場合を除くの外、之を否決したるものなし。且つや、素より憑信すべからざるの風說なりとはいへども、四月の事なりき文部省は各府縣に高等女學校なかるべからざるを認めて、來年度の帝國議會に、これに關する法案を提出せんとするの見込ありと傳へたる新聞紙ありき。教育家は、又、各府縣必ず一の尋常中學校あるを要するが如くに、また一の高等女學校必設の法律案あるべしとの說をなすもの多く、其結果、秋季の帝國教育會總會にては、同議案の大多數を以て可決せられたるあり。蓋し此事たる、終に事實となりて、施行せらるゝの日必ずや之あらん。又師範學校女子部に對する前年來の廢止論を不可として高等女學校と兩立せしもの宮城縣の如きあり。或は彼女子部を起さんは、高等女學校を起すに如かずと議するの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

論者あり。或は高等女學校は良妻賢母を養成すると共に、また女教員を養成すべしと論ずるものあり。蓋し小學以上の女教員の需用、増加し來りたるを以ての故に、此說あるを致す。本年の如き、物價騰貴に伴ひて、一方には小學教員給料増加の法令發布せらるゝありしが爲めに、比較的少給にして而も堪能なる女教員を聘用あるもの、今後次第に多かるべきの狀あるなり。

女子教育の趨勢既に如斯くなれば、既設の各種女學校は其地方にあるものに至るまで、多少に拘らず、其生徒數を増加し、而して高等女學校生徒の增員の如きは、最も著しき現象にして、新設早々滿員を告げて、直に校舍の狹隘を訴へ、開校後僅に半歳時にして、新築に決したると仙臺の如きすらあり。此好况のまた、同種學校新設を催進したるや疑ひなし。且自然の勢として、現在の異主義を奉ずると、即ち宗教女學校の如きもの、盛況に嫌焉たらずして、我が卑劣なる心事の野望を以て、流行に從つて、縣市立高等女學校新設を計畫するの教育家あるを免れず。如斯きは、此時世に當りて、一戒心を要すべきの狀態に非ずや。

以上今や將に過ぎ去らんとする當明治三十年の女學を回顧すれば、事歷の數敢て尠しとすべからずして、筆の之を盡くすべきに非ず。以上たゞ其槪勢をいへるのみ。されど幸に我女學雜誌は、事あるに觸れて、之を網羅し、時運の風向を觀取して、之を採錄するに勉めたれば、有志の士女、冀はくは、再び、新年初刊以後の數百頁を繙閱するの勞を惜しむと勿れ。

餘筆ながらに、述ぶべきは、昨年物故したる若松賤子、樋口一葉二閨秀文人の遺稿の、新春に出版せられたる、また時を同じうして、野中千代女の「新選女大學」の萬朝報懸賞問題第一の撰に入りたるが如き、些か女子の好學心に輔益したるものなしとせざるとなり。

實にや本年女學界の一大現象は、高等女學校隆盛の風潮なり。酷言すれば、これまた一種の流行なりといふべし。されど教育の流行は、頗る慶賀すべくして、吾人はこの二三年間に、雨後の菌毛の如くに興起すべき、高等女學校を望んで、衷情大に之を悅ぶ。而してこの隆盛と共に、日本女風の變遷を來すべきは、火を睹るよりも瞭にして、社會の教育ある女子を要求すると、多きを加へ、由來進歩に殿せる女子の風習必ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一大變遷せん。この變遷のまた多少の弊害を伴隨するとあるべきも、心あらんもの、其起るに從つて之を芟除して可なり。吾人はその弊害を去りて、其善美を勸めん。この來るべき女風變遷の善美なるものは、即ち女子教育を永遠に鞏固にするの根底たらん。今夫れ、高等女學校隆盛時代といふもの、數年にして後、必ずや、世人の飽く處となりて、不振の日は來り、更に、人物を中心とせる私立女學校隆盛の時代、之に次がん。尋常中學校と高等女學校と、素と、其運命を同一視すべからざるの約束、自然に備りて存す。されど彼衰時來るの日といへども、好學の女風を需要すると、既に社會の血脉に竄入するの後なるべきを以て、女子教育てふもの丶趨勢は、必ずや、依然として進歩せん。

かの女風の變遷來りて、即ち家庭と社會との、之が爲めに影響を蒙むるや、夫れ頗る大なるものあらん。其結果猛に打算し盡くすべきに非ず。この大事を催進すると、其度を加へたる、明治三十年の女學界、豈に歳の盡くると共にこれを忘棄すべけんや。吾人、爰に今年の女學を回顧して、思ひ轉た尠からず。されど、多事の日なりきと云ふ能はずんば、則ち大事の機に迫まりたるの年月なりきといはん。この女學の好運の歳、今や吾人は、其多勞を謝して、之を歴史の中に送り、更にヂヤヌスの神が、若やぎたる紅顏を以て臨み來るの新歳に向つて、多望を屬す。且や吾人再び、讀者士女に見ゆるの日は、年と共に、筆を改めて、多年守持せる多少の抱負を以て、女學進歩の爲に、いよ〳〵益々犬馬の勞を辭せざらんとす。

（鷗村記）

いつか我むかしの人といはるべき
かさなる年をおくりむかへて　　西行

旅館寒燈獨不眠　客心何事轉凄然
故郷今宵思千里　秋鬢明朝又一年　　高適

はかなくてこよひあけなばゆく年の
おもひでもなき春にやあはなん　　實朝

評論

大悟の辨

凡そ、物、其の半途未成の所に就きて之を論ずれば、悉な毀るべきものあり。寧ろ、其の本然にして、未だ毫も手を着下せざりしの時に劣るの觀なきに非らず。故に、識者は、其の傾向に就きて論ず、不全未完の缺乏を責めて、全豹を其の未だ成らざるに擯斥することを爲さず。

野人の朴なることや、生ものしりの慢ずるよりは優れり。開化の新に來り、改革の古弊を一掃するや、過渡の人心の輕薄なること、前日の重厚なるに及ばず、此に於てか、人動もすれば則ち學問と文明とを不可とすることあり。左れど、これ識者の公論とする所にあらざるや明けし。

宗教心勃發し、現在に平和を得ずして、安きを他方に求めんとするの人や、大率ね一定の行路を經て進む。即ち、渠は世を厭ふことあり。世を輕んずることあり。世と離るゝことあり。常識倫義を卑しむことあり。國家の別を重んぜざることあり。生死、是非、善惡、邪正の差別を蔑みすることあり。况んや、王侯相將の別、男女貴賤の差、貧富上下の懸隔などに至りては、毫毛の關はりすらなきことあり。左れば、常職を廢し、家庭を破り、五常を輕んじ、所謂る輿論愛國の囂々たる叫びを餘處に聞きて、人世の痴情、競爭、涙、笑、出産、婚禮などを白眼視去ることのあらんは、素より也。此に於てか、所謂る經世的論者喫驚せざることなし。

夫れ宗教的進行にして、もし唯だ此邊半途未成の處に執着し、遂に能く其の聖地に向つて一層の進みを爲すこと能はずとせば、正に是れ熱喝瞋拳を要するの所、痛罵打擊を下すは眞に其分なり。左れど一度び此階段に立つことあるの故によつて則はち之を罵り、論じて之を眞宗教にあらざるものゝごとく斥下するは、未嘗て宗教を驗知せざるものゝ暴論なり。

斯る輩儕は、完備せる宗教の理想とする所を文書にて讀み、又成業せる宗教的偉人の言行を史傳にて讀み、即ち宗教を書籍上に讀知りて未だ曾て親參實修の工夫を躬らせず。故に毫

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

も進路中の變化なるものを知らざる也。方今世上此種の評者尠しとせず、其の揚々として論ずる所偶ま自家工夫の幼稚なるを表白して、反つて敎界法士の惆淚を促すこと多し。評者たるもの少しく其敎的無學を戒めずんばある可らず。

大凡そ、宗敎の要とする所、本我を確識せしめ、天地人生を悟覺せしめ、此の我と此の包圍との關係に於て、至當、至正、至大、至高の平安を得せしめ、隨て、我の深秘奧妙なる歸嚮に安ずる所を得せしめ、以て、大慈大悲、博愛至仁なる無上人心を自得せしむることを第一とせざるはあらず。故に、其修養其鍛錬、其信仰、其悟達、皆な實參親試の經驗的工夫より生じ、躬行實踐の苦き修業を經過せずんば、眞に其の法味を嘗めんとは難しとなす。豈に、讀書文筆の間々裏に得らるべき氣樂なる平易事業とせんや。

故に宗敎上の文字を解するには、身先づ其工夫を試て、而して後ち其の墨痕點々の下に活動しつゝある生ける眞意義に觸着せずんばある可らず。此に至らざれば、文字反つて人を縛し、敎悟寧ろ人を躓かす。故に云く、不立文字と。不立文字とは、不立文字の四字に着するの意にもあらず。不立文字を謂ふ所以の眞意義を掬み取れよと敎ふる『立文字』たる也。

此を以て、厭離と云ひ、棄世と云ひ、無差別と云ひ、無我と云ひ、善もなく惡もなしと云ひ、解脫と云ひ、無情と云ひ、妻子父母を棄ると云ひ、我もなし彼も無しと云ひ、無念無想と云ひ、悟ると云ふが如き種々の敎的文字に對して、只管らに門外の評を爲すもの。若くは、自から實地の工夫を爲さずして單に經世的批評を試ろむるもの。若くは淺墓に生悟りを誇り、宗敎を一種の見榮の爲めにして、初より一大事不得已の衷心の刺擊よりせざるもの等に於ては、皆な此等の文字の眞意義を誤まらざること殆んど稀なり。

試みに、彼の座禪の徒、及び座禪を是非するもの、言ふ所に就きて之を證せんか。禪（隨ひては、佛敎）を破するもの、論ずらく、此は是れ平等無差別を主とし、善惡の別を昏くし人生を輕んじ、經世の害を爲すと。而して、禪に趣くものも亦た初段一時の假悟を大悟の如く感じ、無念無想、枯木寒鳥、脫然殺情の一と時の鍛錬をもて禪定を得たらんが如く言ひ做す、如此きは、皆な半途未成に就て褒貶するものに過ぎず。若し此邊の境界に於て、人生に害する所のもの丶結果なると

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あらんとも、未だ直ちに禪及び佛教の眞價値を定むるに足らず、之によりて、貶するも不可なり。之に止まりて進まざるも亦た不可なり。

一例を洪川和尚に取らん。万年山主獨園の言はく、關以東之禪風歸和尚と。眞とに近世の大禪師なり。彼、一日、孟子浩然之章の實行に工夫し、脫俗の氣勃發す。相國禪寺の鬼大拙に從ひ、服勤碎礪す。兀々として工夫すると二年、其の第一の「悟」に達せしの狀況や、眞に左の如し。

私かに意ふ、我が純工殆んど熟し、大悟の時至れりと。乃ち深夜、獨り禪堂に入り、精神を拜撒し、確座、心を攝す。眼、睫を交へず、淸々純熟、窓の白むを知らず、只だ恍惚として曉板聲の僅に耳に入るを覺ゆる巳。怡悅に堪へず。愈よ益す話頭を提撕し、凝座體究、終日堂を出でず、粥飯皆忘る、黄昏に至る比ほひ、忽然前後際斷して、絕妙の佳境に入る。眼耳惺々として眼耳皆無の如し、須臾にして胸次豁然、眞眼耳を開き、大好事を見、大好聲を聞く、自知自得、恰かも甘露を飲むが如し（此般の妙味、只だ實踐の人にして知る、左れど、文の能く盡す何ぞ麗はしきや）從前の疑團、從前の學碍、底に徹して一時に雪解氷釋し、忍俊不禁、覺えず知らず口を衝き連呼して曰く、我神悟せり吾神悟せり、百万の經典、日下の燈、也た太だ奇、也た太だ奇と。乃ち偈を說いて曰く。

踈濶孔夫子、相逢阿堵中、憑誰多謝去、好媒主人公。即ち忙く院に走り、見處を呈す。演和尚、始めて微笑す。曰く、某曾て禪に妙悟ありと聞く、今日始めて古人の我を欺かざるを知ると。演和尚の曰く、儞ち一旦の慶快を以て是と爲す莫れ、今より須からく四句誓願輪に鞭うち、無量妙慧を煥發し、無數因緣を透過し、而して末後別に生涯あるを識得すべし、無慧の定座は邪定也、愼んで無念無心了すると勿れ。

讀者仔細に吟味せよ。渠は、其妻を棄てたり、其父母を棄てたり、世を脫したり、而して、二年間尤とも熱烈なる禪行を悉くしたり、而して後ち手の舞ひ足の踏む所を知らざる「悟」を得て、踈濶なる孔夫子に再會し、百万の經典を明々了するの意識を得たり。而も、其の更に學ぶ所や、下の如し。曰く、無念無心了すると勿れ、無慧の定座は邪定也と。幾分、眞禪

定の消息を露はし來るものあるを觀取せずや。

爾後經過すること四十四年。只見る、白眉温顔の大和尙盛んに大放生を行ひ、大法會を開き、且つ說きて云く、

凶年飢歲は、衆生、正法を信ぜず、心、非法を行ふの業惑よりして招き來るの天災也。若又、在家の衆、皆な善心を起し、正法を信じ、善根供養を打し、以て殊勝の佛事を行はば、必らずや、國家安穩五穀豐熟の好結果を得んと、快して疑なし。

是即ち、大懷疑、大冷罵より入りたる一大禪師終焉に近きの數話にして、宗敎的確信の存する所、亦宗敎的祈禱の凝る所、遂に此の類の外に存することなきの一例を示す。而して、此に成達するの進行中、幾多の波瀾なきを得ず、而も此波瀾は決して恐れ、忌み、罵しつて以て避去すべきのものにあらざることを知らん。

更に試みに基督敎に就きて言はんか。基督曾て言へり、吾に優りて其父母妻子を愛するものは、吾に適はざるもの也と。又言く、吾が世に來れるは、嫁をして其姑に反かせ、子をして其親に反かしめんが爲め也と。評者あり若し單に此類の言句を取りて、偏へに其文字を淺解し、基督の旨とする所は、父母妻子を輕んじて家庭を破らしむるにありと言はば如何。亦是れ一樣文字に惑着するの誤解ならん。基督言はく、生命を得んとするものは之を失ひ、吾が爲に之を失ふものは、即はち得と。正に是れ、人世の迷を去り、生死の羈絆を脫し、大死一番、絕後に蘇生して、復活更生の新たなる生命を取る可きことを訓ふる者にはあらずや。凡そ此邊宗敎的修練の工夫、佛敎、基督敎、ともに相異なることなし、單に文字に着して淺解し、もしくは、躬行親試せずして巧みに評論をのみ試むるものに於て、乃ち其の眞消息を解すること能はざる也。

此故に、何如なる宗敎に於ても、其の半途未成の所に就きて之を論ずるときは、暫らく經世常倫と相違ふものなくんばあらず。亦、何如なる宗敎的文字にても、之を實踐せずして而して之を冷評するときは、或ひは漠々空々、或ひは不理非倫の觀あることなきを得ず。然りと雖ども、眞乎、宗敎的觀念の爲めに刺激せられ、衷心鬱勃たる衝動によつて直ちに事物の眞相に渇仰し、生死因緣の一大事の爲めに狂ふ計りに法安を求めんとする眞との敎的硏究者に於ては、何の暇ありて、文

字に眩し、教華に溺れ、一時の道草を食つて、路傍の一露に安息することを得んや。必らずや、徹せずんば止まじ。必らずや、文字字下の生ける血を吸ばずんば止まじ、斯の如き人にして、初めて共に宗教の事を談じ、又、宗教の文字を解すべき耳、又、斯の如き人にして、初めて修得工夫の經驗を承知し、懷疑、開悟を生じ、更に大疑を生じ、又更に大疑、大悟を生じ、悟滅し、言滅し、乃はち、言語道斷、拈華微笑、以心傳心の大佳境に達することを知り、此の寂滅は即ち大活動、此の無情は即ち大有情、此の脫俗は即ち大俗たる所以の法味を辨へ、僧に非ず、俗に非ず、我に非ず、彼に非ず、たゞ泣かざるの涙、万斛の胸に湛へ、非情の草木、山河の有情に應じて、鳥讃へ、虫歌ひ、人戀ひしく、友ゆかしく、人生の眞とや極めて樂しきことを感じ、莊嚴の天地、玄妙の人心に向つて、讃美して法樂を歌ふの大安定に到らんずらん。

獨坐秋庭月色新　乾坤何處更同レ人
高歌度二與清風一去　幽意自隨二流水春一
千聖本無二心外訣一　六經須レ拂二鏡中塵一
却憐擾々周公夢　未レ及惺々陋巷貧。

主婦の自殺

（滔々たる天下、其妻を殺すの男子多し。）

曲浦

些か感懷あり、筆を下さんとして、我心甚だ傷む。嗚呼何等悲慘悽愴の事ぞ。此二三ヶ月間に於て、一家の主婦たるもの、、所天の放埒を制め兼ね、家庭の紊亂に心狂ひて、自ら寶命を、毒藥兇刃に斷ちたるもの、新紙の之を傳へ來たると、既に三四。近くは、某軍人の妻なりしもの、夫婿の苛虐殘忍に憤りて、あたら身を、遠州洋、波濤浩渺の間に、魚腹に葬りたるが如きの、慘事あり。世人、如斯き悲哀を耳にすると、必ずや、衷心哀々たらざるはなけん。おもひやり深き女人の如きは、必ずや、死者を憖んで、爲に彼等苛酷獸心の男子の生肉を啖ふて、なほ飽かざるの思ひあらん。又されはこそ、男心てふものは、頼み難きものよと、耿々の憂を抱くものなしとせず。

諸新聞、此等の慘事を傳へて、皆謂ふ、爰に死諫の貞女、烈婦あり、其志、天下婦女の龜鑑なり、彼殘忍、其妻を殺したるの男子、宜しく之を筆誅すべしと。世もまた然りと和す。然れども吾人は聊か別に說あり。

則ち吾人は、彼死諫の主婦を稱して、未だ世と共に貞女烈婦と認むると能はざるものなり。人よ、我を以て死者を責むるの酷に忍なるものとなすと勿れ。希はくは、また以て、漫りに奇論を放つものとなすと勿れ。吾人は、此等悲慘の情狀の裡面に、人の未だ深く感知せざるが如きものあるを認めて、世の爲に、些か辨を費やして、道を正さんとするに在るのみ。我れ豈に敢て辯を好むものならんや」

凡そ諫議に要する處のもの、主君、夫婿に過ちあらば、忠臣、貞婦は、隱れたる處に於て、赤心を致し、至情を盡して、正しき道に復歸あれかしと哀求せんとなり。然るに、もし、上の者の過失、既に他に漏洩するに至つては、これ即ち之を暴露するものなり。諫議の道、爰に至つては、全く廢棄せらるゝのみならず、惡事千里を奔つて、却て我が服事する人の、罪を天下に鳴すものとなり、忠臣、貞婦の志既に破れて、彼等は當に不忠、不貞の名を受くべし。人を諫むるの道は、夫れ難いかな、諫議太夫の官職あるが如きは、たゞこれ一番好笑に値ひすべきのみ。

死諫に至りては、また最も難し。死諫は古へよりこれあり、晉にありては史魚、呉にありては子胥、此外、本朝支那の忠臣烈婦傳中に散見するものあり、後人其高節を稱す。夫れ死は大事なり、而も人を諫めんが爲めに、自ら死するものあらば、好奇心に深き、天下の人、此奇事の素因を探求せずんば止まざるが爲めに、遂に上の人の罪過の、甲唱乙和せられて、世又之を知らざるものなきに至らん。殊に况んや、今の世の如きは、かの新聞紙なるものあり、若し如斯きの珍事あらんか、忽ち之を傳へて、一瞬万里に聞ゆるに於てをや。若し夫れ、如斯きに於ては、死諫の志、殊勝なりと雖も、其行や不義不貞に了るといふべし。凡そ諫議の事跡の、記錄に傳へらるゝは、後人をして自他の是非を評せしむる所以にして、これ豈に眞の忠臣貞婦の志ならんや。眞に忠孝貞節の士女ならんには、何等の事柄に關らず、我美名の人に稱せらるゝを耻べし、門閭の旌表は、却て彼等の苦痛たらずんばあらず。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

忠臣貞婦は、其忠貞なるに加ふるに、侠の志あるを要す。上の人遂に諫むべからざらんか、たゞ默して、竊に其過ちを彌縫し、細心、他に知られざらんことを勉め、雨露の小なるも、遂に盤石を砕くの氣慨を以て、徐に自ら悔悟するの時を俟つべし。孔子は、子の父の爲めに匿すを稱したり。忠貞の士女は、侠氣を致して、例令、自ら醜名を取るも、其君夫の爲めに匿すべし。侠客の一諾を重んじて、人の罪を蔽ふの勇、冀はくは、また臣妻の志にあれかな。

近頃、自殺したる主婦數名の如きは、正に死諫を決したるものなるや否や、これを知らず。恐くは、心悶え、情迫りたるの餘りに、此狂斷あるに至りしならん。吾人は其人の心情を察して、哀痛の念に堪へず。然れども、こは眞に狂斷なりき、これが爲めに、今の今までは、一郷にだも知られざりし、我家庭の紊亂と、夫婿の不德とは、忽ち新紙に發かれて、死者の名は孤り潔きをなして、生者、また世に在るべきの面目を失ふ。安んぞ之を稱して貞烈の行爲りといふべけんや。

吁、吾人は、又更に、彼等自殺の主婦の事を咎めむ。今たゞ、世に在りて甲斐なく、情知らぬ夫を苦に病みて、樂しみなく幸なかりし其生命を棄てゝ、地下に入りにし、其人々の、心根のあはれなるを傷みて、苔の下に吊はんのみ。たゞ恐る、これをしも偏に美談とし傳へて世に勸むるが如き時は、方今家庭の亂脈に、心苦しめたまふ多かる主婦の、万一、我も亦と思ひ迫りて、大事を仕出かし給はんことを。自殺はまた時に流行病の如し。吾はいたく之を恐る。

主婦の自殺せるもの、吾人之を憐むの心極めて淺からず。而して彼等をして死に至らしめたる男子の、殘忍背德なるや、飽くまで之を筆誅せざるべからず。法の罪人たらねばとて、よくも世におめ／＼と生き永らふる、其心根こそ憎くけれ。彼等は自ら手を下したるものにはあらねども、其行爲は正しく、之を殺したるものなり。特に彼矢部某が、妻の癩病を怒りて、嘗て勸むるに毒藥を以てしたりといふが如きに至りては、其暴虐殘忍、實に名狀すべからず。然れども、翻つて、竊に惟んみるに、江湖其妻を殺すの男子、たゞに彼等數人輩に止まらざるを知る。

これぞ眞の天緣なる、人多き人の中にも、此人のみを、生涯の寄るべとなして、明け暮れ夫に奉事する妻の身に、よしや多

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

少の心に染まぬ處あるにもせよ、熟ら其心情を察すれば、夫たるもの、如何ぞ心を傾けて其妻を愛せざるべけんや。由來女は情愛を、我身の天地となして、之を滿されんと、單に夫婿にのみ、これ賴るものを。されど男心の移ろひ易き、歸ぎ來りし其初め、物珍しかり日頃には、情も深き我夫と思ひまゐらせて、折々獨り物し思へば、いとなつかしや、かゝる御方の妻たる身こそうれしけれと、知らでぞ溢す淚さへありにしものを、今ははた、如何なる天魔の身入りけん、夫は、何につけ、かにつけて、我を責めさいなみ玉ふ。我落度をや咎め玉ふと、昔にましてまとやかに仕へまゐらすものを、露ばかりだに、思ひ遣り玉はず。情なや、我にのみ注ぎ玉ふべき情をば、怪しの女に移したまひて、亂行放埒日ましに募り玉ふばかり。さるにても心を知らぬ他人は、妻の仕向けの足らぬが故ぞと、我のみ責むる悲しさや。かくてあらんは、世に永らへても何かせん、獨り室守るさびしさに、悲しさ、つらさ、いとゞ思ひの堪へがたく、さばかり憎しみましまさば、一思ひに殺して玉はらば、今の苦痛にまさりなんものをと、朝な夕なの物思ひに悶ゆる人の妻、廣き此世に、必ずや多からん。獨り妻をして家庭の紊亂に心を苦ましめて、煩惱に堪へざらしめ、爲めに不治の病などに罹らしめて、遂に怨みを呑んで早く地下に入らしむるの男子、蓋し勝げて數ふべからざらん。如斯きは、即ち妻の天年を奪つて、之を殺すものに非ずや。妖婦にうかれて、酌み交す、淫酒のしたゝりは、即ち妻を殺すの毒劑なるを見ずや。兇刃も無情も、共にこれ驕夫、妻を殺すの利器なり。而も人を殺すに、形骸に於てするよりも、情緒に於てするは、殺さるものゝ苦惱更に劇甚ならん。彼は急にして一刹那の痛苦に過ぎず、これは緩にして刻々永時の楚痛なり。身衰へ、心破れて、やうやく死に就くを得んまでの惱みなるものを、豈に堪ふべけんや。

あはれ、たゞ獨の寄邊なる夫に棄てられて、しかも刻々に殺されつゝある、多くのさびしき妻よ、其心の苦しさやいかばかり、思ひやるだに哀れなり。御身如きものゝ中に、思ひ迫りて自ら死を早くするものあるも、此賴みなき世と、彼苦痛とを逃れんものとの悲しき心故なれば、止がたき事もありなん。憎むべきかな、彼無情の男子、其妻を愛せずして、其快樂を奪ひ、其生命を掠ふ、彼は妻を殺すものに非ずして何ぞ。

妻を殺すとは兇漢松平某の如きをのみ謂ふに非ず、彼等もまた然り。吁、人よ、我を以て誇大の言をなすものとする勿れ、滔々たる天下、如斯くにして、其妻を殺すの男子多きを如何せん。

女學校の紀念日

かもめ

基督教主義の各學校、特に女學校に於ては、此十二月廿五日前後に於て、クリスマスの祝會を開きて、救世主降誕の大恩惠を感謝し、併せて、談笑喜樂の中に、教師生徒等相互の贈物をなし、親睦をなして、一年の日子に於ける、學窓の苦を洗ふの、忘年會を兼ぬ。神は、人の子の、無邪氣なる稚心を以て、遊び戲るゝを愛でたまふといへば、此喜びあり、彼樂しみあるが中に、亦此日の惠みに與るの意味ありて、クリスマスの祝祭、心を傾けて、之を營むべきものと思ふ。

また佛教主義の學校にては、釋迦誕生會を祝し、儒教主義のものにては、孔夫子生日を紀念するとあり、皆共に、特に其日を定めて、彼等大恩惠者の、恩澤を感ぜしむると、一層深厚なるを得せしむべし。

さりながら、基督、釋尊、孔子の如きは、其道を奉ずるものゝ、紀念すべき日に當りて、之を祭るは論を待ずと雖も、また、當時學に志すの徒は、親しく學界に於ける、古今の大功德者の恩澤に浴しつゝあるものなれば、また彼等を紀念すべき日を定めて、之を祭るべきの理あり。基督舊教徒或は佛教徒が、諸聖人もしくは諸高僧の解脱日を、誰の日と定めて祭るが如くに、諸學校に於ては、理學者にはニユートン、ケプレル、ガリレヲ、ダーウイン、哲學者にはソクラテス、カント、教育家には、ペスタロチー、フレーベルなど、其他本邦にては、新井白石、賴山陽、二宮尊德、貝原益軒、杉田玄伯の如き人々の生日もしくは死日を知りて、あらかじめ、之を學校の紀念日となし、其日には、其人に就きての性行または功績などを、多少說き明して、教示せんは、諸生をして、彼等偉人天才の恩德を知るといよ〱深きものあらしめて而もまた其智識及精神を補ふと、平素教場に於て漠然學習するよりも、更に大なるものあるべし。これまた彼等恩惠者に感謝する所以の道となるべし。

以上擧げたるもの丶外、和漢洋に亘りて、特に紀念すべき學界及術界の偉人物多し。また大著書例へば大日本史、日本外史、ウエブスター大辭書の如き、諸生が日夕其恩を感じつ丶あるもの丶、成就せし日を紀念するも可なり。素より一日の學課を、此紀念日の爲めに捧げんとせば、其日の餘りに多きが爲めに、却て學問の碍げとなるともあるべければ、其日の朝もしくは夕べの一二時間を期して、諸生を一講堂にあつめて、之を祭るべし。然りと雖も、この紀念祭なるもの、單に一の生命なき形式に流る丶に至りては、素より其効なければ、紀念せんとする人物に就きて、感謝する處多き教師もしくは特に他より聘したる講師が、熱誠尊崇の情懷を吐露して、諸生をして、彼古人に親接するの思ひあらしめんとを要す。吾人は、特に古今の人物を知るとに欠げたる、女學生等の爲めに、此種の紀念會あらんとを希望す。

又くれぬ過ぐれは夢の心地して
あはれはかなくつもる年かな　　定家

各地 工女の狀態

（其二）

◎工女の風儀

工女の風儀に就きては、頗る顰蹙すべきの事多し。其風儀の最も甚だしく亂れたるは、紡績工女にして、これに次ぐものは製糸工女なるべし。而して一般に夜業をなすものに於て最も甚しとなす。稀には、會社の組織規律整頓せるが爲めに、多少正しきものもあれども、大阪の紡績會社の如きに至ては、殆ど一種の地獄宿をなして、警察の監督、何故に此處に及ばざるかを怪しむばかりなるあり。而して、また比較的風儀の正しき會社といへども、職業柄といひ、また無教育の女子の集合なれば、自然悪風に感染して、さなきだに下等社會のアバスレ者が、一層のアバスレとなるとを免れ難し。例へば、王子の製紙所の如き、工女間に淫風公行するありとまでには、人もいはねども、工女の性質、一躰に奸猾となり、心あるものは、これを嫁に貰ひ受けずと聞く。

工女の淫風、もとより之を養成するの原因なくんばあらず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

即ち取締の緩漫なると、無教育者の集合なると、男女工混合なると、また不身持の女の雇はれ來りて、悪風を傳播するとなど、其重因なるが、又、其給料の低廉なるが爲めに、男工などを忍男となして、襟や簪の一つにもあり付く考へなると、恰も宿場茶屋などの仲居が、お客を四五人、(甚だしきは十數人)も取りて、小遣の足し前をなすが如きもあるべし。また夜業なるものゝ釀す弊害は、實に夥しく現に東京麻布の某會社にては、日清戰爭中、夜業を營みし結果、其工女の私生兒六十人餘あるに至りたりといふ。工女風儀壞亂の最も甚だしき例として、大阪の紡績工女に就きて取調べたるものを聞くに、十三四歳の少女既に密夫の取遣をなすの有様にて、或は夜中、上等は廊下、普通は便所を以て、淫行の密會所に使用するあり。相手は多くは男職工なれども、また往々、役員にして、工女中の美人を私有するもありといふ。或は職工いづれも、白き綿毛を以て纒はれつゝある故に、夜間に入りては、電燈の明光ありと雖も、遠くに離れ居りては、男女の區別もつかず、殊に朦朧たる監督者の睡眠の屆かねば、此時淫行を遂ぐるに便りよしといひ、また或は、業務繁忙なるに

從つて、樂しみを求むるの念强きが爲めに、淫行更に甚しといふ。また或る會社の如きは、技能の如何に拘はらず、好男子を役員或は職工に雇入れて、工女中の幅利者と關係せしめ、之を利用して、工女等の逃亡を豫防するものもありとかいひ、或は、表面は職工なれど、其實は男地獄にして、甘んじて、工女の翫弄物となり、而して折角苦心の貯蓄金を蕩盡せしむる如きものゝ、諸會社を徘徊するありとか。また我の情人は、また彼の情人たる有様にて、爲めに淫婦の衝突を來たすとありとぞ。而して私生兒墮胎等多きは自然の結果なり。

たゞに大阪のみならず、上州地方特に桐生邊の製糸工女は悪風甚だしく、また時々慘状を演出するとあり。先年四人の工女が、相共に身を利根河に投じて死したるが如きも、淫行に持くづしたる身の仕末に困ずる餘に出でしものといふ。右に述べたる大阪工場に於ける最醜體の概况は、また全國内何處にても工女の悪風ある處には、即ちこれに讓らざるの怪事ありと見て可なり。さりながら、同じ大阪の工場にても、工女の出生地を異にするによりて、風儀に上下あり、例へば、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

江州者はよく働く代りに、淫行もまた最も甚しといふ。されば地方の風習の上下によりて、工女の風儀もまた異なるべし。また工場によつては、他の模範たり得べき程に取締の行き届きたるあり、また稀には心掛けよき工女ありて、解雇せられて郷里へ歸る節には、夥多の貯蓄金を携ふるものもありといふ。

◎工女の教育

大坂の一紡績會社の一工女、平素左傳を愛讀するものありと聞けども、かゝるものは、他にまたとあるべくも非ずして、一般に工女は、無教育なり。されば工女教育などゝ唱導する論者もあり。又、多くの工場にても、教師を聘して、一二時間づゝの夜學課などを設けて讀書、算術、習字、裁縫等を教授しつゝあり。而して其の成績の多少は、取締の緩嚴と、風儀の善惡とに正比例せるものゝ如し。而も會社自ら、世上の體面上、教育を施すと稱して、其實はこれに不熱心なるものなしともせず。風儀壞亂せる工場にては、茶菓を以て、やうやくに教場に工女を集むるが如きをなせども、偶ま來るものは、學問はそこのけ、茶菓が第一の所望なるが多き有樣なりといふ。

◎工女の飲食、衞生及疾病

工女の出づる、多くは細民中よりすれば、工場の自から手を勞せずして、前に備はれる飲食物は、此處なればこそ、食し得らるゝ分外の御馳走なるが如し。されば田舍より出初のものは、あまりの馳走に、過食して胃病を起すものもありといふ。たゞ京都の某會社の如きは、不充分の食物を與へて、工女をして空腹を訴へしむるあれども、名古屋及四日市に於ける三井製糸所の如きは、役員職工同樣の食物を取り、食堂も清潔なりといふ。

いづれの工場にも、大低一二槽の浴場備はりありて、男女工をして毎夕入浴せしむるよし。されど凡て衞生上の注意は、即ち會社の善惡に從つて等差あり。疾病は即ち衞生の注意の度に比例するものなれば。支配行屆きたる會社には、從つて病者少きが如し。

紡績工女の疾病中最も多きものは、肺結核なりといふ、綿

花の空中に飛散すると甚しきが爲めに、呼吸器を害すると多きに原因するなるべし。脚氣病、眼病、胃病、及ひ婦人病など、一般に工女には多き病氣なりといふ。

幼兒健康の狀態　（醫學士三島通良氏調査）

國民健康の狀態は、之を其幼兒の健康に察すべし。頃日文部省衛生會議主事醫學士三島通良氏が、女子高等師範學校附屬幼稚園の園兒年齢男三年七ヶ月より六年七ヶ月、女三年八ヶ月より六年五ヶ月に至るもの百五十人に就きて其健康の狀態を調査したるものを見るに、實に左の如し。

檢査人員	百五十人	
內　強壯なる者	五人	百分の三、三
健康なる者	五十一人	百分の三四、〇
患者	九十九人	百分の六六、〇

即ち知る、健康者は、總員數の三分の一強にして、患者は其三分の二弱に及ぶ。強壯者に至りては、僅に五指を屈するに足るのみ、而して其病患者を區分すれば、左の如しといふ。

腺病（患者百人中八八、〇）	八十七人	百分の五八、〇
輕症の者	三十二人	
中等度以上の者	五十五人	
胸隔構造不全	十五人	百分の一〇、〇
內「ペルツ」氏帶痕滯ある者	八人	
貧血	十一人	百分の七、三
營養不良	七人	百分の四、七
皮膚病	十一人	
眼病	二人	
耳漏	一人	

即ち、肺結核病の素因たるべき腺病を患ふるもの、百人中の五十八即ち六割弱を占め、又患者百人中の八十八即ち九割弱に當る。比年肺病患者の增加する、此幼兒の狀態を見ても、其所以の一斑を推知すべきなり。而して、該園兒は、多くは上等社會の子女にして、御坊樣、御姫樣育ちをなせるものなると、また一の注意を値ひするものなり。患者如斯く多きに拘らず、比較的營養不良者の尠きも、亦、彼等の家庭の富裕なるによるものと知るべし。

立かへる年のゆくへを尋ぬれば
あはれ我身につもるなりけり
教長

教育家の獨立

長汀

大學獨立すべし、文部省獨立せしむべしなど、教育家は常に説く處なれども、抑も今の所謂教育家なるものは、餘りに依賴心の強くして、獨立の氣慨に乏しく、其甚しきものは、世に諂ひ、官に媚び、人に阿るを事とし、奮然、教育家を以て任ずるの特操あるもの少し、如此くにして、彼の獨立をいふ、たゞ是れ畢竟、空中の樓閣を夢みるが如きのみ。

今の教育家の氣慨なさ加減も甚しいかな。文部大臣以下諸役人の我意に叶ひたる人を得ば、當路の方針即ち立ちて、教育界の能事、既に了るに等しとおもへり。官の力よく万事を成すべしと空想するの稚心や、憐むべく、この空想あるが故に、誰も彼も名々、自ら大臣に成らずんば、到底不平の止まぬ野心を、明々地に示して、敢て悟らざるなり。法律と行政とありと雖も、人倫を正すと能はざるを知らば、又文政整頓すと雖も、教育の大道立つ所以にあらざるを知るべきものを、而も自ら厚く教育に任ずるの人物ならば、文政の組織法令の有無に頓着せざるものなり。素より、法立ち、形整ふて、學政其宜しきに達せずんばあらず。これが爲めに、國民進學の門戸、いよ／＼廣開せらるゝと雖も、今日の如くに、一にも二にも學政論に囂々たるが如きは、教育家としては、見下げられたる次第なり。我れこそは在野の教育家なり、朝に在るもの、よろしく聘を厚くして、我に下問すべし、さらば教ふる處あらんなどゝ、威張り散す、稚氣なる大教育家連の多きこそ、いとはしたなけれ。國民の先達と自らおもへる人々の、この有樣にては、いと賴みなきとなりといふべし。總じて、今の所謂教育家中には、これぞとて賴みとするに足るものなき程なれば、素より尊敬感服すべきものゝあるべくもなし。吁教育界、何ぞ如斯くに人物に欠乏せるや。

新文明の空氣を呼吸してより既に三十年餘に及ぶの今日、最早、第一に社會に卓出すべき教育家にして、特立獨行の氣慨を以て、天下を導いて、學問の獨立を計る程の人物の現出す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べきものと思へるに、何とて其人を見るとの遲きや。曩には「日本人」の所謂敎育閥より以外の一二敎育家にして、此氣概と精神とに多少富みたるものありしも、今や既に亡し。其人逝いて後、たゞ群小の囂々たるを聞くのみ。高等敎育會議が、敎員に勳章を授與すべしなどいふ、馬鹿氣たる問題を、大事にかけて、苦心せるも可笑し。

我れこそは、日本の敎育家と任ぜる人の、存外に經綸なく、卓見なきのみならず、道といふヿに就きての修練の欠乏せるとは、呆るゝ計なり。彼等が倫理敎育の議論、宗敎と敎育との議論などの如きは、もし悟道の達人をして聞かしめなば、たゞ一番苦笑を酬いなんのみ。悟道は宗敎の事なり、倫理及び敎育と相關せずなどいはゞ、更に大笑すべきのみ。

また高等敎育會議は宜しく其組織を膨大にして、多數の敎育に關係ありとのヿ網羅すべし。如斯くにしてのち、初めて其効あるべしとは、一般敎育家の議論と見えたり。然れども、其効ありといふは、社會と當路といづれにとりての事なるか、吾人の見る所を以てすれば、高等敎育會議なるものをして、眞に學政上に有力ならしめんとならば、少數堪能の人物を擧げて、文相の補佐顧問たらしむるにあり。もしまた政府が議會を操縱するが如くに、文相が、議論の八釜敷高等敎育會議を操縱して、施政すべしとならば、多人數の議員を擧ぐるを可なりとす。而も議員多數なれば、從つて異說紛々甲論乙駁一事の相談も、容易に決着せず。而して左樣に議論を費したる丈の妙はと問はば、たゞあるなしと答ふべき結果ならんのみ。議論畢竟、毫も天下に事を成さず。帝國議會の大討論は茶談の間に既に纏まりたるものを、形式的に繰返すのみにして、これが爲めに、一人の己に贊同するものを起したる例なきを見ても、實は無効のものなるを知るべし。詮ずれば三百議員は、頭數勘定の爲めに出席あるものといふも可ならん。代議會の眞相如斯し。然るに何でも、大々的高等敎育會議を組織せば、學政擧るべしなど思へるは、猶代議會の假相を夢みて、未だ覺らざるものゝいふべきヿのみ。なほ昔のまゝの西洋直譯思想なるぞ可笑しき。

今の敎育家に勸む暫くそのあまりに酖醉せる書物上の學說を擲ち、活眼を以て、古今の史跡を觀取し、故きを溫ねて新しきを知り、以て一かどの卓見を磨くべし。卓見なくんば、

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

獨立の氣慨ある能はず、從つて學問の獨立もまた希望すべからざるなり。文部省獨立すべし、大學も亦獨立すべし。されど今の世は未だ、此等の獨立を支持するに足る程に、獨立特行の氣慨ある教育家あらざるを如何せん。既にこれを欠く、されば、今の時に當りて偉大なる教育家を求め出さんなどゝは、地に俯して天を舐らんと企つるに等しきのみ。

◎米國に於ける白知兒教育の現況

セグイン、ウイルバア出でゝより、米國は今や、世界に於ける白知兒教育の、最も整頓し、且つ盛大なる國とはなれり。「アルトルイスト」雜誌の記する處によりて、其現況を聞くに左の如し。

◎合衆國白知兒の數　は統計家によるに、十万人乃至十五万人の多きを算すれども、國内散在の諸白知兒學校は、たゞ僅に六千人を收容するに足るのみと。

◎全州白知教育の分布　は左の如し。

四校を有するもの　ニユー、ジエルシー

二校を有するもの　マツサチユセツツ◎ニユーヨーク、◎メリー、ランド◎イリノイス◎ペンシルバニア

一校を有するもの　ミ子ソタ◎カリフオルニア◎ワシントン◎インデアナ◎子ブラスカ◎オハイチ◎コン子クチカット◎カンサス◎アイチワ◎ケンタツキー◎ウイスコンシン◎ミシガン◎バージニア

別に設立せられたるものなきも他州の校に入學せるものあるは、　ニユー、ハンプシヤイヤ◎ワイチミン◎ヴエルモント◎メイン◎デラウエア

特に學校の設けなくして、白知兒を孤兒院、養育院、感化院等に收容せるもの　ミツソリー、◎オクラホマ◎モンタナ◎オレゴン◎アイダホ◎北ダコタ◎南ダコタ◎南カロライナ◎ニユー、メキシコ

白知教育の及ばざるもの　フロリダ◎テクサス◎子バタ◎ユタ◎アリゾナ◎ロード、アイランド◎西バルヂニア◎ジチルヂア◎アラバマ◎ルイシアナ◎コロラド◎ミスシツピー◎アルカンサス◎北カロライナ

これによりて之を見れば、白知學校を有するもの十九州内、ニユー、ゼルシー州を以て最も多しとなす。校數總計三十一。全然之れを欠くものは二十八州なり。されば地方によりて觀察すれば、其最なるを西部、新英州地方にありといふべし。

◎エルウイン白知學校　景況

ペンシルバニア州なるエルウイン白知學校は、米國に於ける白知學校中、最も盛大なるものゝ一にして、よく一千人を收容するに足るとぞ。此校を視察したるものゝ記事を左に摘錄して、以て白知教育なるものゝ一斑を示さんとす。

白知教育上の經驗によるに、一般に白知兒と稱するものは、即ち Imbecile 及 Idiot の二種に區分せらるべく、而して前者は低等、中等もしくは高等教育に耐ふるものあれども、後者に至りては、普通の監督教導以外に一層の注意あるを要するものとぞ。

白知兒は皆別々の室に入れ、身體上の必要を補ひ、また自立の精神を鼓舞するが爲めに、綿密なる注意を要し、また强者をして、弱者を助導せしむることを勉むるべからず。また劣等なるもの即ちイジオットに至りては、清潔の習慣を養ふの外

教育の施し方なしとぞ。優等者、即ちインペサイルは、其能力によりて三等に分ちて、これを教育すと雖も、イヂオットに至りては、到底讀書などを學び得ざれば、平常其身躰機關を鼓奮して、家事もしくは農事などに勞働せしむ。

◎教育の方法　エルウイン學校にては、生徒をして、日々天然の美觀例へば、花卉草木等に接せしめ、また室内を淸潔にして、植物、圖畫等を以て、之を裝飾して、家庭に在るの思をなさしめ、或はまた、舞踏會、幼稚園、演劇、書籍館、印刷場、家畜などを備へて、事々に悦樂を得せしむ。其上、敎場にては、毎日婦人の教師が、或は動植物の標本などを示すとあれば、また圖畫の嗜味を養成するなど、勤勉忍耐して、生徒の能力開發に盡瘁しつゝあり。

また工作場に於ては、多くの白知兒が、或は籠、敷物、卓被其他の製作に從事するもあり。活版事業に從事するものあれば、また大工を事とするものあり。いづれも、熟練なる教師ありて、教授を加へつゝあり。凡て校内の教育法は、最と普通學校の教授法の摸範となるべきもの多く、苟も白知教育に苦心したる教育家ならんには、普通幼兒の教育は、物の見事に成功すべしと思はる。

いづれの教場に於ても、生徒をして時間の長きが爲めに疲勞を感ぜしむるとなく永く一室に留め置かず、甲より乙に乙より丙に、轉々移室せしめて、常に活動の氣を保たしめ、また凡ての躰育を始めとし、兵式躰操などは、日々の數課となりて生徒をして盛に活動せしめつゝあり。

音樂は、また白知教育上頗る必要の教具にして、エルウイン學校にては、大講堂内に美麗なるオルガン、壯大なるピアノなどの備へ付けありて、斷えず奏樂せられ、生徒はこゝに會して、或は幼稚園の唱歌を吟ずるとあれば、また優美高尚なる奏曲を聽くとあり。

晩刻に至れば、教師、監督、生徒一同相會して、其狀、宛然一大家庭の夕べの團欒に似たるものあり。手紙を受取るものあれば、また其日の出來榮につきての褒美を獲るあり、後、共に祈禱讚美を神に捧げて、明日の働きの爲めに、一夜を平和の裡に眠るなり。

◎官學的教育家

日本人の教育閥、よくもいはれたり。教育家の名は、多少官に緣故ある者若しくは大學派などの專有物の如くに思へると見えて、而してこの不振なる教育界中にても、最も望を屬すべき人物は、彼等は之を見て、彼は宗教家なり、これは文學者なりとて、己と共に教育家の列に置くに値ひせざるものとなすが如し。高慢なる教育家よ、今より我は爾を以て官學的教育家と稱せん。

◎湯武居士に質す　（投書）

湯武居士に質すとて、教育時論の蓄妾論、及宗教々育論に對して京都の山川清なる人、一篇の論駁書を本社に寄す。其蓄妾論難に曰く

居士其蓄妾論に於て論じて曰く、血統を重んずるは、我日本の國風なり、故に血統を重んずるが爲めに、蓄妾するは不可なるなしと。其論旨を推すに子なきを以て全く婦人の罪となすものに似たり。されど學術未開の往時にありてはいざ知らず、科學進歩の今日に於て、何人か子なきを以て、婦人のみの罪なりと斷ずるを得るぞ。既に婦人のみの罪にあらずとせば、女子にして夫婿を迎ふるもの、若子なければ、其故を以て男妾を蓄ふるも不可なるなしと謂はざるべからず。天下如此きの不偏不道あらんや。今一歩を讓り、蓄妾蓄男不可なしとす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ゐも、其これを定むるは、何れの時期、何れの場合を以て宜しきに適ふものとすべきぞ。結婚後多年にして初めて子あるもの、世間其例珍しからず。居士は他に石婦石男を診するの法術ありとするか。倘一歩を讓り、石婦石男を診定するの法術ありとするも、居士は尙ほ子なきの故を以て、數妾を蓄へ、數男を迎ふるも、不可なるなしといふか。世の色を漁するの男女をして、名を血統の重きに借りて、數妾數男を蓄へ其獸行を逞うし、其淫慾を恣にするものあらば、何を以て、これを制せんとかする。家を亂し、國を賊ふもの、實に此種の論にあり。居士其日本主義を奉じ、國躰を持せんとするの熱心、此見易きの理に惑ふ。世若し居士を以て、其學ふところを曲げて、國に阿るといふも、居士何を以てか、これに答へんとかする。

◎氣質鍛錬に關する調査

群馬縣碓氷郡教育會の、同郡長の諮詢に答へて、「精神的教育」即ち氣質鍛錬を完成する方法とて、左の十餘ヶ條を以てしたりといふ。

一　教師は、常に堅忍不拔勇壯敢爲の精神を持して、其任に當り以て生徒の模範たるべきこと。

「是れ氣力ある教師にあらずんば氣力ある生徒を養成すること能はざればなり」

二　學科教授に於て修身科は、實踐躬行を主とし、剛德に關する諸行をして、修業及卒業を認定する上に最も價値あらしむべきこと。

體操科は、教師適當の服を着し、其種類によりては、帶劍を爲すべく、又高等生徒には木銃を持たしむべきこと。

歷史其他の學科

（讀書作文地理唱歌等）に於ても、常に氣力の養成に補ひあらしむべきこと。

三　軍隊勅諭、並に軍人宣誓を讀聽かせ、又古來講ぜし所の武士道の談話をすること。

四　時々兵營を參觀せしめ、演習を實見せしむる等凡て軍規の嚴正なるを知らしむること。

五　規律的動作を實行せしむること。

六　時々遠足運動を行ひ、務めて、山川を跋渉し、又競爭運動を爲さしめ、以て豪壯の氣力を養ひ、艱苦に堪ふるの氣質を成さしむること。

七　凡て生徒は、襟卷頭巾晴傘を用ふるを禁じ冷水拂拭を行ふ等、務めて皮膚を强固にするの方法を設け、風雨寒暑に慣れしむること

八　校舍內外の洒掃修繕等を爲さしめ、專ら勞動に堪ふるの習慣を養成すること

九　諸種の誘惑物に打克たしむること。

例へは、諸興行遊日等娛樂の爲には、課業を廢せしめざること。

十　日用各種の物品は、實用に適するを以て度となし、衣服の如きは、質素を旨とし。殊に女子には、專ら注意して華美に流れしめざること。

十一　高等科男生徒には、隨意科として擊劍を課すること。

但し衛生に害なき樣注意すべし。

十二　古來賢哲の肖像を講堂に揭ぐること。

十三　紀念會を開くこと。

是れ愛國心を喚發し、敵愾心を養成し、歸する所は義勇奉公の奮勵心を興起せしむるにあり。例へは元軍を鏖にせし日、太政復古の日、憲法發布の日、遼東還附の日、等には、生徒を講堂に會して其事實を談話すること。

擧げられたるものゝ中には、眞の精神敎育の要材としては、之をしも要するや、却て虎を描かんとして、猫に類する結果を來たすものなきやと思はるゝ、節々なきに非らざれども、今の官學敎育家は、いづれも、彼間に對して答をなさんと、此と大差なかるべしと信ずれば、參考の爲めに、こゝに擧げつ。

隨感

明治三十年

明治三十年を迎ふるや、占して曰く、水天需と。其の難に近づくと彌よ迫まれるを感じて深く警戒する所あり。惟ふに本誌の讀者の夙に知諒せらるゝ所あらん。圖らざりき、新年に入りてより直ちに悲痛の事あり、帝室の大喪に遭んとは。臣子の忠懷之を哭すると猶ほ疇昔の如きものあらんとする也。之よりして、日輪の轉ずる所、公事日々に非なり。名士の忽然として逝くもの殆んど算なきのみか、政運正に末路に瀕して、機轉の妙未だ成らず、蒼生只だ疾苦の增加し來るに嗟歎せるのみ。顧みよ、本年の如く、惣べての團結を解躰し、あらゆる人物を上下し、走馬燈明幽けきが上に、今歲の如く早く幾變轉せしもの、近年にありや。知る可し、明治三十年の實に非尋常の時期たりしとを。

一顧して長望すれば、浮影遠近に消え失せ、幻夢長短に斷絕し、榮華の誇り一炊の臥床に遺りて、邯鄲の實、容易に捕捉しがたきは明らかに知られ、嚴然たる人生の規律、俄かに蔑にすべからざる所以を覺りけん。もし逆境の福音に聞かんとせば、今歲の如きは、眞に最良の敎訓を垂たり。然りと雖ども、機運一とたび歩を轉じて、亦た徒に回へさず。明治三十年の逆境は、明治三十一年に及んで、更に強く激甚ならんとする也。何者の軟蕩子ぞ、早く救濟を乞ひて、迅速の成効を祈らまくするぞ。天の大任を下さんとする時、先づ其の筋骨を勞せしむ。逆境反つて人を活かし、順境多くは人を殺すと知らば、方今國步の困難は、豈に有志男女の徒爾に免かれんとを希ふべきものならずや。

夫れ、日東の天子、維新の大詔を宇内に煥發して、世界の人之を忘るゝとなし。明治新政三十年に及んで豈に早く挫折すべけんや、當年志士の赤忠、凛乎として存す、吾人後進の輩幸ひにして斯の生を今の時に稟く。互ひに其の長を獻じて、各自に鞠躬せずんば、ひとり聖天子の大御憂を如何せん。蓋し逆境の困厄は、軟者を淘汰して、硬者を撰拔し、以て其死活切迫の大機の近くを、托せんとする也。天上に物見人多

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し、幽魂皆な環視す、后代に志士あり、長く當年に鑑みんとす。我と思はんほどの男女は、大いに畜積して更に彌よ其の勇を鼓せずんばある可らず。

嗚呼、恥は及ばざるより恥はなく、弱きは自棄より弱きは無し。密かに古人に問へば、其志遠々として高し、何ぞ吾が卑きや。審びらかに、吾が衷情を吟味すれば、尙ほ義勇の膽淺し。これ豈に至大の恨事にあらずや。世上の逆境と、國變の艱難とを憂ふる莫れ、これ天の斯土に大人を出さんとすれば也。たゞ自から棄つるを憂ひよ、吾が畢生の殆んど空爾に歸せんとすれば也。歳畢らんとして、心を卷き、徒らに憂を算へて、胸を塞うせんとするの友よ。希はくは、同もに氣を鮮やかにして、皇天を拜し、凛烈の勇を吹いて、心肚を張らん。以て、來るべき一歳の更にいよ〳〵困厄するを迎へん。これ吾黨、道を固ふするの學課にあらずや。

かりそめの草の枕さおもひしに
今よひ明けなば二とせやへん
師光

南遊行

○舟航人生に似たり

船の港を發する時、天朗らかに氣晴れて、一碧万頃に渡り、白鳥近く人影に飛んで、婆娑として聲あり。少らくして汽笛一叫すれば、火輪白波を蹴り、昂然として進む。林樹、徐に辭し去りて、離島漸く全姿を現ず。顧りみて一道の白路十又餘町に渉るを見て、初めて船の走る快速なるを知れり。日輪、長天の西に落つる比ひ、風波、錦を破つて、船は玄界灘の怒濤の中に入る。客大抵苦悶沈號す。ひとり兒童の無心にして遊戯するを見る。暴ると一日にして、少しく靜かなる時、船中の一小犬病めり。水夫圍繞して弄笑す。某あり、寶丹を取出でて其の口に灑がしむれば、渠れ俄然として起ちて震ふ。衆笑はざるなし。先の大いに苦悶せしものも亦た來り覽て興じつつある也。休憩室には、骨牌を鬪はせ、黄白を賭するものもあり。酒に醉ひて放吟するものもあり。陋猥の談話に長じて衆客の頤を解き、揚々たるものもあり。何處の新伉

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

儷ぞ、比連綢繆として一室に同臥す。衆交も窺かに指ざして大に笑ふ、滿船之を話柄として續々として醜語あり。凡そ斯の如き、陽春忽ち來復して、さきの鬼面も皆な笑はざるなし。孰か一葉の下乃ち死の波あるとを憶はんや。時に風なきに怒濤復た大いに起り、船甚はだしく動搖す。器具の轉倒する、突擊破壞する、客の痛悶する、歷々として吾が耳朶を打つ、特に痛ましきは、水夫君三々五々の罵しるなりけり。曰く、遂に無益ならん、水に投ぜよと。暫らくしてジョンの子犬ジヤミと名けられたる可憐の一小犬は、投然として白波の中に棄られたり、潸として袂を沾ほすものは誰ぞ。此中何の處ぞ朗々として笛を吹くものあり。激濤、舷を打ち、客衰へて聲なき時、夜半遠く秘曲をつくす、心にくき風雅にてありけり。吾もと船病の僻あるもの、かの兒童の戯むるるを見て忽然として得る所のものあり、遂に幸ひにして終夜此笛を聞き、微笑して樂しむ。東天初めて白らみ、前峯近しと言ふもののあるや衆俄かに蘇生す。細雨糸の如く、恨思斷續の時、船は基隆港に着す。餘波尙ほ治まらず、船を下る甚だ難し、而して、衆客何の要ぞ先を爭ひて止まず。小艀の先ず發せしもの二艘、遂に沈沒す。救難の船到る時、救はるるもの僅に二人とは謂へり。父子昆弟が、相分れて尙ほ本船より出でざりしもの慟哭す、救はれしもの少しと聞きて既に聲なし。而して、支那人は兩手櫂を繰り、ジヤンクを艀の間に割入、平然として多錢の客を貪る。問屋の男丁等罵つて曰く、溺れしものはチヤン／＼ならんのみと。

夫れ、一葉の孤舟、水波を渡る、人生の形狀歷然として存す。此夜、游子、客窓の下に獨り深く思へば、百憂千慮綿々として盡きず。嗚呼、人を憶ふの苦、何れの時か斷たん。衷情抑へんとして禁ぜず、眼中、拭へども潤ふ。

○意中の文、口頭の吟

古へより悲しきとは絕えざりしならん。悲しき歌として今人のもてはやすものの昔より澤なればなり。文字の妙なるものは、一時、一種の人是を賞そやせど、万人の汎く知る所とならず。万人の汎く知る所となるは、万人の情を歌へばなり。淸の趙甌北曰く、人々意中に有る所にして却つて未だ人の道過を經ざりしが、一たび說出するときは便ち人々其意の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

出んと欲する所の如くして、流播に易く、遂に當時に傳へて后世に名あるに足れるなりと。三田の老文士又曾て曰く、人々意中の絹糸を採つて錦を織る、織り成せば人皆な見て合點納得すと。われ今ま古人別離の詩を吟じて惆悵して止まず。たゞ古人また之れありと知りて、少しく寂寥を慰さむるなり。

○交通は同情なり

開拓は交通にはじまる。交通の便ある所、人の往かざるなく、人の往きて、開けざる所なし。惟ふに、船車の往來は、異境の間を縫ふ同情の糸か。山川風土も亦た同感同念の交通によりて和睦す。水陸豈に無情を好まんや。

○徳何かあらん

試みに主府を去れば、路人大抵、内閣諸公を知らず。况してや、政黨の離合と、賣收の價格の何文錢なるとを知んや。もし、新聞紙を讀まざるものに至りては、天下殆んど常に泰平、只だ其の營業の損益を知るのみ。店頭客多ければ、官吏の尊きを知らず。市上。事繁き所、何ぞ法令の制規を思はん。既に帝德を忘る、安んそ政治家と稱するものを眼中に置かん。家に妻子あり、途に沽客あり、商賣繁昌の只管に有がたきとを念ふの時、それ何の暇ありて、議會を顧みんや。政界の才士、過度に憂ふるを休めよ。支那人は着々として利蝕し、亦た戰敗を記憶するとなし、公等の經綸は遂に紙上の討論として了らん歟。

○支那人

われは其の人種學を知らず。偏へに、其の奇異なるに驚歎す。もし日本武士、淺狹にして小義に激し易きの自負心をもて看下し來らば、殆んど毫も其の美を認めがたかるべし。而して、彼等は優に宏濶なる特長を存するを如何せん。日本人の敵としては、彼等の如く不都合なる者は稀なり。彼等は虚榮を棄て、實利を拾ひ、名を忘じて利己を圖る。其の天子を棄つるは、彼等が難しとする所にあらず、日本たとひ其の帝室を覆へすも、支那國を如何んせんや。支那の政治と支那の社會とは、截然として分別せり。彼等は、戰に敗走するを恥

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

とするものにあらず、戰ひによりて利せざるを恥とす。然りと雖とも、彼等、其の國を愛せざるにあらず、其國膨大にして、平時愛國の名なし、愛國の名なきは吉兆なり、たゞ亡國の時、暫らく忠臣を出す、むしろ彼等の不吉とする所ならん。彼等は、日本をもて貿易に小なりとす、安くんぞ玆に大賓を輸さんや。瀕々として來るものは、無產の子、其產ふ仕上んとて也、路頭の可憐子尙ほ五百金を貯ふるものは多し。嗚呼、彼等の利に走るものは、我が利に趨くよりは速し。而して、彼等の超然として世を忘るゝものは、我の仙骨よりも太し。彼等は殆んと、我の權衡に乘らず、別に量らずんばある可らざる也。嗚呼、支那人よ、汝等は、我が敵か、抑も味方か。汝等は蓋し茫然として國を忘れ殆んど種別を意料外に措くものならし。これ豈に日本人の苦手にあらずや。われ、基隆港頭に幾百のジヤンク、シヤムパン、波濤にもまれて去來するを見、其の啁々として異音を叫んで日本人と競ふを聞き、撫然として長歎す。夫れ、我邦を磨勵するものは終に只だ支那人かと。

○年暮文虫子を追ふ

歲花まさに落んとして、人意さびしからざるなし。年々速かに去りて、老の至る早きをかこつ族こそ多かんめれ。但だ夫れ、年の暮の悲しさは、禿木骨立して、寒風蕭殺たるに緣む。眼をあげて四面枯れ果てたるこそ、冬はさびしきなれ。今玆十二月、われ今ま暖氣に浴して、蚊を追ふを思ふ。思ふて悲しきは、依然として歲の暮れんとし、人の老いんとし、友の別れんとすればなるへし。風景の人を催すとあり、人の風景を催すとあり、人と風景と相和して樂しき時ぞ、樂は眞とに至れる哉。

久客儂人百事慵　春歸幾日是殘冬
長安雪後無來往　報國門前獨看松　　程嘉燧

月雪もふるき枕に年くれぬ　　杉風

右大臣實朝

おうそむ

右大將頼朝、舅氏の力を假りて、府を鎌倉に開き、業を子孫に垂れたる、其三世の後、清和の源清き流れも、あはれ此君に盡きにける、鎌倉の右大臣、源實朝こそは、古今の史上、人物甚だ多きが中にも、とり出でゝ、いとも憐みを寄せ、悲みを致すべきの人なれ。

あはれ、この實朝、果して如何なる人物なりけん。人多くは稱す、實朝は、一個優柔尫弱の男子なりしのみと。蓋し頼山陽一派の見る處に唱和するものなり。山陽意へらく、實朝は紈袴乳臭、義時の愚弄する處となりて、危機咫尺に迫りて、なほ之を悟らず、遂に命を兇刃に殞せりと。されど此言や、未だ以て實朝を評し得たりとなすべからざるもの〻如し。

ます鏡の記者の、左衛門督頼家をあげつらひて、「少しおちゐぬ心ばえありて、つはものども、そむき〳〵になりにける」といひ、また「督は日にそへて、人にもそむけられゆくに云々」といへる其筆を轉じて、實朝をいふや即ち、

この大臣は、大方心ばえうるはしく、猛くもやさしくも、よろづめやすければ、ことわりにも過ぎて、ものゝふの靡き隨ふさまも、代々にもこえたり。

とて贊詞一方ならず。されど此記者は、即ち實朝に知るに近きものなるが如し。

實朝は、蓋し必ずしも、優柔不斷の乳臭紈袴兒にはあらざりけん。兄頼家の、頑狂にして、衆望咸な背くに反して、律義なる鎌倉武士の靡き從ひしを見れば、彼は、よく士を愛するによりて、またよく士より愛せられたる一個の好人物なりけん。而して又、其卓絶せる歌道の天才ありしより見れば、學識當世を壓するに足りけん。深謀ある尼將軍、奸黠なる相州の將軍廢立をなせし所以のもの、多くはこれ、謳歌するものゝ太郎にゆかずして、次郎に奔りしを知ればなりけん。されば則ち實朝なるものは、人に上たるの智量徳望、やゝ其身に備はるものありしなるべく、源氏の父祖に耻ぢざる一大將な

りけんされど彼は、彼鎌倉の覇府に將軍たるには、餘りに好人物たりしなり。其の位に在りて施す處なく、剰へ自ら非命を遂げたりとて、彼に酬ゆるに一嗤笑を以てすると勿れ。當年鎌倉の天地、此實朝を容るゝには、餘りに奸惡詐謀の氣を以て盈たされしなり。もし彼をして、いとまあれや、春の永日櫻かざして遊ぶなる、百敷の大宮人に交りて、殿上に立たしめなば、あつばれいみじき大臣大將なりけん。文事かの如くに富めり、加ふるにまた源家讓りの武備ありしものを必ずや爰に文武の才能の施すべきよしを得たりけん。而も彼の天稟は、由來、公卿殿上人より愛好せらるべきふし多かりしが如く、自らも亦月卿雲客の手振を習ひつらん。一公卿たるます鏡の記者が、彼贊嘆あるもの、もし審かに、其消息を聞かば、或は此邊に關はりなきにしもあらざるべし。

朝廷の志きりに、實朝の官職を進め給ひ、恩寵父祖に越え、年僅に二十八にして源家未聞の、大臣大將の高位に昇りしと、時の上皇、鎌倉の專權を忌み給ふのあまり、實朝の高位に驕りて、いち早く自滅を招きて、其治世を縮めんとを思し寄せてなりといふものあれども、こは素より理義に迂き揑造説に

過ぎず。竊に惟んみるに後鳥羽、順德ともに、いみじき歌人にておはし、俊成定家家隆などいふ大匠つぎ／＼に起り、斯道の麗華、此時に爛熳たり。實朝は、定家を師として、斯道に至り深く、更に萬葉の調を尋ねて、歌才、當世に秀絶えたり。されば百官好を彼に寄するもの多く、隨つて、雲上の聽にも達して、實朝こそは、なみ／＼の東夷にはあらざりけれ、やさしきものよと、度々の勅撰にも許したまひて、恩寵をかづけたまひしは、即ち、官職をも進め玉ひし、大御心なりしとは知らる。且つ歌道を賞し給ひしもさるとながら、なほ他に上皇の志を動かすべき隱微の勢力の必ずやありしならん、今知るよしもなし。されば、眞に實朝、權を執るの世なりけんには、上皇の鎌倉を惡しみ給ふとも、或はさばかり深からざりしならん乎。然れども、其生るゝや、處るべきの時に非ず、在るべきの家に非ず。其天稟却て己を禍ひせしこそ哀れなれ。

凡そ人世の不幸なる、時世に遭逢せざるより悲しきはなし。不運なりし實朝の時世を見よ。賴朝の猜疑心と、北條氏が私門の權勢を張るの野心とは、源家の骨肉を殺し、其枝葉を削

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り、實朝に至りては、遂に孤立の狀あり、依るべきの血族既に在らず、又賴むべきの臣下なし。母の胸中は知り難く、叔父の陰謀は測り難し。素より勇決剛邁の氣に欠げ、且つ詐謀を以て詐謀に酬ゆるの術策なきものなれば、たゞ自ら偶人に等しき虛位を擁して、成るを待ち、樂しみを詠歌に寄せて、遣り難き不平を醫したりしならん。されど彼の歌は、一般和歌の調べの平和なるが如くに平和にして、憤慨咨嗟の聲を洩すとなければ、これによりて、當時の實朝が衷情を知るべからず、然るに、かの、眞僞はいざ知らず、右大臣に進められしや、源家の正統も、予に至りては、最早傳ふべき子孫なし、予飽くまで官職を貪りて、父祖に酬いんと、人の止むる諫めを用ゐざりしといふもの、彼が胸間多少憤慨の志、よつて存する所を思ひ知られてあはれなり。實に此種の憤慨は、實朝の胸裏に、常に鬱如なりしものなくんばあらず。

實朝の地位は、頗る危かりき、自ら又之を知らざるの理なし。凡そ其危きとは、之を我骨肉の末路に徵すべし。秋風吹きすさぶ寒燈の下など徐に身の行末を思ひて、明日とはいはじ、今が今とても危きと累卵よりも甚しきを知らば、刻々非命を覺悟せずんばあらず。さりとて、此位棄つべきには非ず、とは思へども、遠く六十餘州の外に必至の禍を遁れんと欲して、渡來の宋僧に命じて、唐船を造らしめしも、用に適せざりし折の痛嘆如何ばかりなりけん。鶴岡拜賀の夜、館を出でなんとして、一糸の髮を斷ち、和歌を詠じて、

出でゝいなば主なき宿となりぬとも
のきばの梅よ春を忘るな

と歌ひしとは、讖をなして、出でゝ去にて、歸らぬ人となりしといふも、思へば、此時のみ、何となく此禍を未前に察せしにてはあらず、時々刻々之を待ち設けたるとなれば、敢て憶せず、腹卷も着で、死地に就きし、其心事は恰も小松內府の死を熊野に祈りしといふにも似、辭世の一首は、菅公が「東風ふかば」の詠を思ひあはせしものとを見えて、其衷情、豈に哀れむべきの極ならずや。

要するに實朝は亂世の雄資に非らずして、彼は治世の才人なりき 之を以て彼に處せんとする、夫れ甚だ難いかな、然るに山陽の如くに、治亂興廢の跡に慷慨するの餘り、この不運命者が一片の衷情を掬せず、後人を誘つて、彼を嘲罵せしむ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るに至つては、情あるものは、更に其情を六百年の昔に運び、痛んでこの實朝を弔はずんばあらず。

爰に至つてか、吾人、この鎌倉右大臣が、歌道の才能に就きて、多少の評論なくんばあらず。然れども、今暫く筆を爰に擱いて、更に後日を期す。

鑛山雜詠（於生野）

琴城　巖範

何唯六月絕炎氛、此地由來多異聞、不假八閩機杼具、瀑線千丈織綾紋。

僻境山深無客過、奔泉一帶掛巖阿、若移京洛繁華地、裙屐相追避暑多。（綾瀑距白口街西十四五町垂下數千仞委蛇爲紋如綾羅因名焉）

靈洞鑿來經幾年、山民不復事桑田、一爐煮石工場火、散作銀溪千戶烟。

雄閣崇階山腹橫、連甍高下勢崢嶸、煉金煙斷秋林晚、卓絕峰東寒月淸。

時文

◎女子教育論纂　吉木竹次郎編　普及舍版

此書は知名の教育家諸氏が、近年の演說及び文章に現はしたる女子教育に關する論說二十二篇を收集したるものにして、多くの異說を開くに便よく、また其議論の價値は兎に角、かく多くの知名の人々が、心を傾けて女子教育作振を主張するてふとは、女子教育論やうやく盛んなるの今日、多少補益するあらんと、必ずしも辨を須ゐずして明かなり。

◎女子教育要言　三輪田眞佐子著　國光社版

三輪田女史曩に「女子の本分」「女子處世論」の著あり、今また、過ぐる一歲時間女鑑に連載したる「女子教育要言」の一冊子となりて出版せらるゝあり。女史の女學論に於ける、造詣する處深く、一種の見識を備へて、女流中稀に見るの論客なり。されば「女子教育要言」の價値の如きは、既に女史の名を知るもの〻明知する處にして、贅辭を要せず。吾人は此書に接して益〻、女史が斯界に於けるの勞を多謝す。

◎福澤全集緖言　福澤諭吉著　時事新報社版

福澤翁多年の自著の散佚せんことを憂へて、「福澤全集」の出版を企つゝや、先づ、其緖言を時事新報に連載し、其完稿の日、一括して一小冊子となりしものを、この書とす。記事以て、翁が維新以來、文明の輸入に勞したる功績の一端を窺ふべく、また西洋の智識の、如何にして我國に入來せしやに就きて知る處あらしむ。

◎訂正再版再版普通看病學　佐伯理一郎譯補　吐鳳堂版

本書は獨逸ビルロート氏の看病學を譯述したる者にして、既に前年其第一版を出版せしが、今回の再版には大に訂正を加へ、全文を通じて傍訓を施し、又新に小兒看護法の一編を增補したるなど又版型を大にし、定價を減少したるなど、頗る前版に異なる所あり。多くの看病學の書籍中、此書の如きは其上乘に位するものにして、學校の教科書に適…

て高等女學校を設置せんとを…

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に異なる所あり。多くの看病學の書籍中、此書の如きは其上乘に位するものにして、學校の教科書に適し、また家庭に於ける育兒衛生の研究に於ける良考新書なり

◎新著月刊　第十卷　東華堂版

『離合』は小杉天外の作、『子煩惱』は張白毫庵の作、『慈善會』は鏡花の作、いづれもさりいでて云ふに足らぬ作なれども、其中にも孰か可なりといはゞ、離合第一にして、次は子煩惱か。慈善會はいつもながら、奇に過ぎたり。時文、雜錄は寧ろ本文にも優りて、興味ありて、讀むべし。

◎女學文壇雜俎　十二月中（本誌〆切り迄）

◎良家の女子には高等專門の學科を授くる必要なし（加茂之滿）	女鑑第百四十六號
◎寡婦論（三輪田眞佐子）	同上及百四十七號
◎保姆の任務（岩谷英太郎）	女子の友第十二號
◎女子教育に就きて（嘉納治五郎）	教育公報第二百五號
◎學校兒童發育取調報告（三島通良）	同
◎婦道新論	裏錦第六十二號
◎女兒の教育につきて（直江俊三）	岡山縣教育會雜誌第二十六號
◎家庭と道德（三輪田眞佐子）	家庭新聞第二十二、二十三號
◎女子教育	報知新聞十二月十八日
◎人倫の爲に之を云ふ（海軍大佐矢部興巧の事）	萬朝報十二月十四日
◎裸体畫禁止說	都新聞十二月十日
◎家庭のいましめ（林恕哉）	やまと新聞連載
◎婦人の心得（坂谷芳郎）	大日本婦人教育會雜誌第九十九號
◎婦女の道（金成磐峰）	家庭雜誌第百十一號
◎高等女學校の學課に東洋史を編入するの必要	女鑑第百四十七號
◎日本女子大學校設立に就て（成瀨仁藏）	女子の友第十三號
◎道德の源は家庭に在り（三輪田眞佐子）	同上

片々

◎女子教育訓令　下る、其要は小學校以上、男女別學を必要とし、また各府縣にて高等女學校を設置せんことを奬勵するものなり。吾人既にいへり、この三四年間は、高等女學校全盛の時代なりと。然るに今又この訓令あり、上の好む處、下之に從ふの理にて、來年以後の高等女學校の新設せらるゝもの、極めて多かるべし。吾人、本號の社說『女學一年の回顧』を草したるの後、此訓令に接す。而して、我黨數年來の私見、いよ〳〵誤らざるを證せり。

◎高等女學校　を各府縣競ふて設置するに至らば、爰に基督教主義女學校の上に一大恐慌を來すべきは、必然の數なり。特に今は同主義女學校の地方の高等女子教育を獨占して、生徒も可なり多きものあれど、一度府縣立高等女學校設置せらるゝあらば、乍ちにして、疲弊を來さんと、火を見るよりも瞭然たり。既に鳥取の一宣教師女學校、縣立高等女學校の設置に合ふて、衰運殆ど挽回の見込みなき狀に陷りたるの證例とへあり。されば今にして、地方基督教主義女學校たるもの來らんとする危急に應ずるの策なくんばあらず。

◎さらば之に　應ずるの策如何。自ら進んで、高等女學校の体度を執りて、地方の有力家に結托するか、また若しくは、一種他の類似すべからざる、而して俗人すらなほ必要なりと認識する一特色を備へんとなり。而して尤も必要なるは、多分の資金を準備せんとなり。勿論後日高等女學校衰微して、私立女學校重んぜらるゝの日あるべしと雖も多くは資力に乏しき教會もしくは有志教徒の手によりて維持せられつゝある彼等女學校たるもの、今にして良策なくんば、或は其衰運疲弊の時日を通過すると難からんとす。

◎女子教育訓令下るや、報知新聞之を評するの要に曰く、文相の此訓令、何等の實施的經綸なく、また豫測的希望をいへるに過ぎず。一片の訓令、疵瑕頗る多く、たゞ要は女子教育に心ある、文相の着眼を喜ぶのみ。其言設的經綸發作、緩急の度を圖り、運用の妙を極め、之を巧言して巧作するの文部大臣的手腕能才に至つては、更に大に今後の御勉强を要すと。

◎裸体禁止說　都新聞裸体畫の禁止せざるべからざるの理由十條を擧るに、◎一我が婦女子を侮辱するものなる事◎二、風俗紊亂の媒介を爲す事◎三、裸体畫に對する美術の妙を知る者稀なる事◎四、我裸体畫の意匠筆力共に野鄙醜劣なる事◎五、裸体畫を禁ずるも美術の發達を妨げざる事◎六、春畫と相距る一歩なる裸体畫の流出する事◎七、風俗の嚴正は微を制せずんば保ち難き事◎八、裸体を愛するは必竟野蠻の遺風なる事◎九、婦女子をモデルと爲して其淑德を壞る事◎十美術の爲に社會の風紀を犠牲にし難き事。要するに歐洲の馬鹿々々しき流行をして、國俗を亂るを惡むものなりと曰へり。

◎年末婚禮數の減少　每年十一月と十二月との二ヶ月間は、貴賤上下共、一般に嫁入婿取の式行はるゝと多き例なりしが、本年は物價格外の騰貴と、金融の逼迫したるとにより、一般に不景氣となりたる爲にや、婚儀沙汰頗る減少し、いづれ

も來年の事にして、先へ延ばす向多く、從つて右用調度品の賣行も亦思はしからずさぞ。

◎矢部某　海軍大佐の榮職に在りながら、武人金を吝しむのあまり、終に其妻をして自殺せしむ。江湖之を非難せざるはなく、万朝報の如きは、人類社會の義憤を代表して、彼の非を鳴すして、堂々之を責め、なほ社會の狀を非難するとの足らざるを嘆ず。

◎備後福山　に師範校女子部の卒業生なる一娼妓ありさ

◎全國尋常小學校女教員俸給額　統計協會田中太郎氏の調査によるに全國尋常小學校女教員俸給の平均額は、本科正教員にて七圓九十二錢、同准教員五圓三十錢專科正教員六圓十六錢同准教員四圓十一錢なり。而して本科正教員俸給の最多額は東京の十六圓全國平均九圓八十九錢、其最寡額は宮城福島靑森山形石川鳥取島根廣島山口香川愛媛佐賀十二縣の五圓全國平均六圓六十二錢。同准教員俸給の最多額は北海道の十圓全國平均六圓八十八錢、其最寡額は宮城の二圓五十錢、全國平均三圓九十一錢。專科正教員俸給最多額は群馬の十五圓全國平均六圓七十八錢、同最寡額は愛知の二圓全國平均五圓七十二錢、同准教員俸給最多額は北海道の八圓全國平均五圓三十二錢、其最寡額は新潟三重の一圓全國平均三圓〇八錢なりさいふ。

◎新年の禮服　和服にては

男子用　四十歲位の禮服は羽織を黑五ッ紋の小模樣の鹽瀨無双仕立（背裏の模樣は雪の松に明烏、紐は白の大和打さし、着物を三枚重ねにして、上衣は黑羽二重の五ッ紋下着二枚は瀨利久羽二重、裾裏は三枚さも下着色の無垢仕立、胴着は白紋羽二重に墨繪富士に登り龍の模樣、裏は白絹を用ひ、襦袢は白濵縮緬に背より袖に掛けて住吉踊りを寫したる者、半襟は着物胴着の袖口さ同樣にして下着さ同色を用ひ、帶は綴錦織の亂縞、袴は都平の鼠の棒縞之に適する英吉利形のトンビ黑淡地無地羅紗、裏は鼠の佛蘭西絹襟に獺の皮を付けたるもの此代價合計二百五十圓より、稍々地質惡ければ百五十圓乃至二百圓位なり。

令閨向三十歲位の禮服は、上衣濵縮緬黑の五ッ紋古代の桐鳳凰の點在せるふき模樣さし、下着二枚は白の紋羽二重の無垢、長襦袢は淡小豆色の紋縮緬袖さ半襟は白の紋縮緬、帶は厚板錦織の媚茶地に寄金にて古代の松越の海に霞の消し摸樣を織出せしもの、帶揚は銀鼠の紋縮緬帶止は純金牡丹の金具附にて大和打にして、（婦人の禮服は羽織を着せざるを以て玆に記載せず左れども車上寒氣を防ぎ又は途上塵埃を避けんが爲には吾妻コートを要す）吾妻コートは紺の艶格子綾羅紗、裏は高田繋ぎの繻子梅結の黑太打の結鈕、此代價合計二百三十圓以下百五十圓位迄なり。

令孃向　十七八歲位の禮服は濵縮緬三枚重ねの曙模樣地色は、淡鳩羽裏は葉柳さし、其模樣は隅田の風景、長襦袢は、緋亂菊模樣の紋縮緬、半襟は白鹽瀨古代桐模樣、帶は厚板錦の黑地にて、古代式紙に松竹梅、帶揚は紅、檜皮、藤色の段染紋縮緬帶止は平打純金重菊の金具附き、之に適する吾妻コートは淡利久矢筈綾羅紗、裏は藤色に菊牡丹模樣の縮珍、藤色太打撚結びの紐此代價合計二百五十圓以下百八十圓位迄なり。

縞物　にて最も賣行宜しき男物は諸絲織、緊絲織、博多織、一樂織等にして、縞柄は鼠の萬筋、大名縞等一反の代價十圓より二十圓位にして之に次ぐは結城紬、銘仙縞、節絲織、縞柄は前記同樣代價は一反五六圓より七八圓迄なり。又女向きは紋織御召一反十七八圓、風通織一反十四五圓、縞御召一反十圓前後、絲織一反七八圓位なり男女共書生羽織の高尚なるは紋御召一反十六七圓位にして澁味のあるは例の大嶋紬一反十四五圓、普通の好にて八反織一反十圓前後のものなりさ。

又男物洋服の流行は

燕尾服　は黑薄地無地羅紗の三つ揃ひ、黑佛蘭西絹の裏白繻子の袖裏にて形は襟巾廣く胸明き緩なるを好しさす。此代價四十圓前後のもの代議士連の注文多しさ。

フロクコート　上衣さチョキを黑繻子綾羅紗さしズボンは黑又は紺の中立縞綾の羅紗（一見無地に擬ふもの）裏は黑上等の毛繻子、袖裏は白地に藍の大名縞の綾絹、形は總て緩かなるものを貴び、ズボンの先きは細きもの流行す此價三十五圓前後、

モーニングコート　黑又は紺の變り斜綾一本綾或は鼠鐵色の霜降り繻子綾又は斜綾の上衣に黑又は紺地の艶絲立縞のズボン裏は前記同樣此代價三十圓位。

オバーコート　以上の諸服に適當なるオバーコートは濃肉色鼠の無地綾か鐵又は鼠の霜降り綾羅紗、裏は表に適する色の綾絹、袖裏は白茶地の亂立縞綾絹にして、長は膝頭より五分程下りしものを貴ぶ、此代價廿圓以上。（時事新報）

◎工女さ早婚　東京小名木川木綿會社員の談に曰く、同會社の工女の多數は一富山より來り、廣島靜岡等之に次ぐ。紡績業にては、十四五才以上既に一人前の働きをなせども、機業にては二十才前後に達せざれば、到底一人前の働をなすと能はず、普通一人をして四臺を管理せしむるを常さすれども、外國にては一人にて七八臺を處理するものありさ。日本の女子は大抵十七八才より二十歲にして結婚するが故に熟練なる工女を養成すると能はず、又一旦妻さなりたるものは、生理上精細の技術を欠ぎ、且敏捷に業務を執ると能はず、故に早婚の制を改むるに非らざれば、外國の如くに、一人にて七八臺を處理するとなどは、到底出來ざるなりさ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎女子教育に關する文部省訓令

濵尾文相、任に就くや、爰に文部省訓令第十二號を以て、女子教育に關する訓令を下して、北海道廳府縣に示さる。曰く、

方今小學教育の普及と師範教育の擴張とを計圖するの際小學校に於て男兒と女兒とは務めて學級を別ち教室を異にし尙便宜學校を別にし各其性質慣習と生活の必要とに應し最も適切なる方法を以て之を教育せんことを要す此の如きは啻に男兒教育の實相を益發揮するに必要なるのみならず又女兒教育を益女兒に適切ならしむるに依り自ら女兒就學の數を增すことを得ん師範教育に在りても亦管理訓育の方法等益女子に適切ならしむるを要す故に公立小學校及尋常師範學校の施設に關して左の要項に依て計畫する所あるべし

一、市町村町村學校組合又は其區に於て二個以上の尋常小學校若くは高等小學校又は尋常小學校の教科と高等小學校の教科とを併置する小學校を設置する場合に於て通學に妨げなく且女兒の員數一學校を構成するに足るべしと認むるときは女兒の爲に學校を別にする事

一、二個以上の尋常師範學校を設置する場合に於て女生徒の員數一學校を構成するに足るべしと認むるときは男女に依りて學校を別にする事

女兒に須要なる高等普通教育を施す爲に高等女學校を設置の計畫を怠らざるべきは是亦緊要とする所なり而して女子尋常師範學校を設置する場合に於ては土地の情況に依り便宜高等女學校を之に併設するも妨げなし

明治三十年十二月十七日　　文部大臣　濵尾新

◎橫濵小學校女子高等補修科設置の計畫　橫濵各公立小學校にては、同市に二三の外國人設立女學校あるも、教育上不滿足の事多しとて、小學校令第七條に、尋常小學校又は高等小學校に補修科を置くとを得とあるに從て、有志者等各學校に一つの女子高等補脩科を設置するの計畫あり、先頃來運動中の處、賛成者多きを以て本月十二日同市役所樓上にて第一協議會を開きたり。また調査會を開きて、之が施設の準備を急ぎ居れり。其學科課程なるものは、修身、讀書、作文、習字、算術、裁縫の六科にして、一週二十八時間、修業年限二ヶ年との事なり。然るに橫濵貿易新聞は、其學科の餘りに低度にして、補修科は、其實一の復習學科に過ぎず、當局者宜しく、今にして更に高度の數科を立てゝ完成の者を設置せんとを計るべしと論ぜり。

◎毛利高等女學校の服裝　山口に設けられたる舊藩主毛利侯の高等女學校に於ては今回女生徒の服裝を改め、着衣は總て木綿と爲し、髪は蝶々髷に、頭飾はタケナガに限り、下駄は表なき分にて、凡べて日常の調度は質素にすべき樣教頭より訓戒したりといふ。

◎小倉高等女學校設立の决議　豐前國小倉にては、兼て高等女學校設立の計畫ありしが、此程議いよ〳〵熟して、企救郡役所に於て、小倉高等女學校組合會といふを開き、愈々設立するとに决したり。其設計は、全組合にて費用を負擔し、其幾分は縣費の補助を受けんとするものにて、建築費は、校舍及び寄宿舍並びに所屬建物を合せて五千六百八十圓、教員小使の俸給より、書籍器械等の備品等總べての經費は、一千二十六圓、總費額金六千七百圓の豫算なりといふ、其學科は高等小學以上尋常中學以下の中間に在る程度とし高等小學等成業以上の學力ある女子を教育せんとするものなりとぞ。

◎熊本尙絅女學校の近況　熊本市にて有名なる私立尙絅女學校は、同地の教育家內藤儀十郎氏の設立にかゝるものにして、設立後日に盛大を加へ、去九月末の調査によれば、現在生徒六百七十一人、內縣下在籍者五百八十六人、卒業生百二十三人內縣下各部に奉職せるもの八十六人なりといふ。

◎孝子受賞　茨城縣東茨城郡渡里村士族金澤甚左衛門は資性溫良能く父母に事へて令聞あり。明治六年父を亡ひ、家督相續せしも、餘財なきを以て晝夜農業及び荷車挽等をなして、母を養ひ十六年十月母の腦溢血症に罹り、起居自由ならざるに至りし以來は一層其業を勵み、傍ら看護に注意し微けき生計の中より、母の好むものは必ず買調へて之を侑め孝養怠りなかりしも遂に廿八年十月母を亡ふ。爾來父母の靈位に奉ずること生前に異なるなく鄕黨其志操を賞せざるなし。事其筋に聞え同縣知事より金五圓を賞賜したり。

◎至孝なる老夫婦　佐賀縣杵島郡六角村大字東鄕の人力車夫木室順六(六十)と云へる老人は其業の賤しくして家計の困難なるにも拘らず資性至孝にして平素能母に事へ殊に母が不隨病に罹り病蓐に在るを老躰の身にて益〻家業に精勵し僅の賃錢を得て常に母の嗜好に從ひ慰養懇切到らざるなく二十年の久しき其志行を變ぜず妻のおみす(五十五)も夫を助け姑を慰め專心業務を勵み、夙夜看護に怠らず孝貞を全うする茲に多年夫婦共に奇特なるにより今回各金若干を賜ふて之を賞せられしとぞ。

◎特志の父子　兵庫縣姬路市白銀町に住む木槌彌三平といふは年齡五十に餘りて家計裕かならず他人に雇はれて用達に步き一日僅に三十錢計の賃錢を得て生計を立つるほどの境界なるが其傍ら同市金町の活版業者に賴みて名刺を取次ぎ其利益にて每月一本宛の雨傘を調へ置き其を雨に遇て困る人に貸與へ又は他人に急用を賴まれし折腕車に乘れとて賃錢を與へらるゝ事などあらば彌三平は之を受けず急用さへ差支なく濟せば宜しかるべしとて老たりとて尙ほ走るに堪る足あれば腕車

など勿躰なしと辭して受けざるが常にて、万一用を達せし後慰勞にもと強て金錢を與へらるゝ事あれば家事に費消せずして赤貧者又は行脚旅人などに施行するなど常に奇特の振舞多し。其子下村虎太郎も父の善行に劣らず十二才の時より大阪西二階町の煙草商鹿谷品藏方に奉公して、九ヶ年の間一日の如くに勤め其間に得たる給金は一錢も濫費せず一ヶ年の給金を三分して一分を老婆が佛參の費用とし、又た一部を父母の小使となし、殘りし金を三十八、商業、姫路の三銀行へ預けて積留きしに、今や二三百圓に及び去年徴兵に合格して、十二月一日入營せし以來は、下賜手當金とも毎月父母の許に送り猶ほ本年八月中獨立隊に加はりて臺灣へ渡りし後は月々得る六圓餘の下賜金を悉皆實家に送るより、父母も其の金をむざ〳〵使ひては、分疏なしとて悉く慈善の事業に使ふ事とし、本月上旬には、報國盡忠と染め抜きたる一百筋の手拭を持て姫路及び附近の入營者ある家戸を訪ひ一筋づゝ分ち與へたりとぞ。

◎貞婦受賞三件

茨城縣新治郡園部村　本宮りウ

資性柔順平素能く夫に事へ、夫不治の病に罹るや看護扶持に心力を竭す、十年一日の如く夫貧ゟ易ふるや老軀能く農事を勵み候段奇特に候事

明治三十年八月四日　茨城縣知事從四位　小野田元凞

香川縣三野郡本山村高木瀧野妻　秋山イク

常に舅姑に事へて孝を致し、夫に對して貞操を盡す、明治二十五年夫眼疾を患ひ專に就くや專ら藥餌を供し、針灸を薦め、只管治療の途を竭くせしも不幸遂に癒えず、全二十九年に至り、全く明を失せしのみならず、又中瘋に罹り半身不隨となり、家計益々窮乏に陷る、イク此間に處し毫も屈せず、幼兒を背にして晝夜力役に服し其得る所を以て、醫藥及日常の諸費を辨じ、他人の補助に賴らず、婦人の身を以て一家數口の生計を支持し能く舅姑を慰め病夫を看護す、其志行堅實克く久しきの艱難に耐へ、更に渝る事なし、洵に奇特の至りとす、依て其賞として金五圓下賜す

明治三十年九月七日　香川縣知事正五位　德久恒範

廣島縣安藝國賀茂郡川尻村小出來代吉妻　かつ

資性溫厚舅姑に事へて孝夫に貞姑病に罹るや看護周到、殊に姑は中風症にて身躰自由ならざるを扶持し、日夜湯藥の勞より、衣服洗滌に至るまで、力を盡さざる所なし、舅姑前後相殁す、之に事ふる猶ほ生前に於けるが如し、其志操二十年の久しき毫も渝る事なし、洵に奇特とす仍て爲其賞木杯一個下賜候事

明治三十年十月一日　廣島縣知事正四位　淺田德則

◎孝女受賞

山形縣米澤市黑川町士族舟山正直長女　ヨノ

天性孝順幼齡の身を以て、克く子たるの道を守り、兩親に孝事し二妹を慈愛し、家益々貧にして、志愈々篤く、事大小となく躬其任に膺り紝織其他の賃錢を以て家計を助く、又祖母の病蓐にあるや、枕邊に侍坐し、心膽を碎き看護至らざる處なし其行爲洵に奇特とす仍て爲其賞金二圓下賜候事

明治三十年十一月　山形縣知事正五位　菊池九郎

◎琉球の孝貞婦　沖繩縣下島尻郡、島島村國吉樽の妻、糸數ウタといふは、十七歲の時吉樽の許に嫁ぎしなるが、吉樽は赤貧洗ふが如く、夫婦は元より、年老いたる舅姑の衣食さへ意のまゝにはならぬより、資性至孝のウタは痛く之を憂ひ己れが實家より持ち來る纔かばかりの衣服は、殘らず義理ある兩親に供給し夫と共に刻苦勤儉只管家道の挽回に心を盡し居りしが、夫吉樽の病死せし後は、一層心を孝養に用ゐ傍ら女子の鞠育に從事するうち、不幸にも又姑の長病只さへ不如意なる手元のいよ〳〵不如意を加ふれども、ウタは更に撓むの色なく日夜寢食を忘れて看護に手を竭し、居る事玆に二十餘年其の操行實に全縣下に比を見ざる處なりと云ふ之に依り奈良原同縣知事には去月十七日褒狀並に金五圓を下賜せりと。

◎孝女受賞　高知縣高岡郡蓮池村田村耕三姉イト(三十五)は幼にして母に別れ、貧寠の間に中風症の父を看護し、且弟妹に友愛なる廉を以て、此程同縣知事之を賞して、金一圓を賜ふ。

◎海戰外女報

◎歐洲婦人の非戰主義論　英獨佛國の婦人社會には、此頃万國平和主義の運動起れり。獨國婦人社會に於て、此主義主張の首領はベルチ、ザッテル夫人にして、同夫人は此頃平和主義の雜誌を發行せり。其第一號に佛國の婦人が獨乙の婦人社會に送りたる公開書并に其復書なるものを載せたるに、いづれも盛に主戰論を排せり。歐洲の諸新聞は、またこの運動の美事を賞賛すといふ。某新聞の如きは譬語をなして、既にこの平和論者の如きものにあるに、怪しむべし、慈悲仁愛を主とすべき法王レオ第十三世の却て熱心なる主義論者ならんとはいへりしとぞ。

女學雜誌自第四百三十三號至第四百五十六號總目錄

明治三十年度

◎口繪

天賜(ブロツクホルスト畵) 四百三十三號
迎護(カウルバツハ畵) 四百三十五號
雛まつり圖解 四百三十八號
日本最初の女學生 四百三十九號
ヘレン、ケレル孃とサリバレ女史の肖像 四百四十一號
護りの天使(ブロツクホルスト畵) 四百四十三號
米國プリンモア女子大學の景 四百四十五號
草刈の休憩(クロツプ畵) 四百四十七號
セグイン博士の肖像 四百四十九號
寡婦亡夫の墓に題す(ゼノア府墓地の一碑面彫像) 四百五十一號
入相の鐘(ラウブ畵) 四百五十三號
角答衞生圖 四百五十五號

◎社説

四方拜 一
積善の家餘慶あり 二
皇太后陛下崩御 四三
無常に感あり 四四
御養蠶 四六
御埋葬 八三
御園藝◎信心堅固なるべし 八四
本願寺改革論を評す 一二二
學問の心掛を失ふべからず 一五九
女子大學 一九九
最初の女子洋行第二十五年期◎孤女學院改稱
灘の川學園慈善市◎宗教感は女性の粹なり 二〇〇
家庭の春 二三七
實際の人品 二七五
盲啞才女ヘレン、ケレル孃と其訓育者
アンナサリヴアン(青柳猛)(四百四十一號)三一三
現在の瘙痒(四百四十二號)三一三
特り女を責むべからず 三五一
白擬の嘆 三八九
外國人設立の女學校 四二七
女學生の勉學 四二九
米國女子大學勉學に望ある者 四三一
女風一變の機勢 四六五
夏休の女學生 五〇五
那波氏の慈恩講 五四一
二種の世界合同運動(H S生)(赤十字同盟と婦人矯風會) 五七九
拓殖に於ける婦人 六一七
立家の基礎は氣長にすべし 六五五
逆境の垂訓を聽くべし 六九一
實際の着眼 七二九
政論家は相撲取の如し 七三一
進取開國の氣慨 七六五
女學今後の文政 七六七
冬天亦花影なし 八〇三
女學一年の回顧(鴎村) 八三九

○家庭

大陽暦の家庭 九
一家經濟の整理 一二
たゞさあまへ 一三
女子手藝の案内(一)美よしの 一四
音物の情誼(鴎村) 一七
家庭の樂は小事より成る 八六
火鉢のほさり◎大望ある商人◎物價騰貴◎一家
備付の天秤◎御馳走◎生計の度合◎山師◎失敗
者に看護せよ 八七
女子手藝の案内(二)美よしの 九一
ひさり言(紫琴女) 九五
(婦人の氣質◎夫婦配合の氣質◎子供の面前に
て子供を識ること)
實地家政(某女記) 一六一
(炭の入用◎裁縫と料理◎掃除の事)
子供と金錢(鴎村) 一六三
子供のほしがるもの◎おもちやの仕末 一六五
女子手藝の案内(三)美よしの 一六六
火鉢煙草盆の事◎長人への介抱◎長人の歸り
し時◎まゝ母の手鍋にはかけじ 一六九
秘密内外の混同 二四五
家政學の精髓 二四六
伯母樣(鴎村) 二四七
堪忍の藥(山岡活石) 二五〇
滋養の品々(新渡戸まり子)(四百四十一號)三二三
家庭養蠶の樂(さくら)(同) 三二七
出產同所早見表(同) 三二九
財產家の維持 三五三
徳川家康の育兒(すゝか生) 三五六
二宮尊徳先生逸事中の逸事(福迫生) 三五九
大阪の慈善事業◎果實の料理法 三六〇
上流今日の家庭 四三一
儉約を口にすべからず 四三三
同伴者ありさの心地 四三四
盗賊の防ぎ方 四三六
子供の有の儘の答 五〇七
女の自墮落(曲浦) 五一〇
路人に與ふる一杯の水(かも子) 五一三
朝顏栽培法 五一四
某學校女生徒の家庭日記 五八三
家の厄介 五八五
心づきたるまゝ 五八七
武士の家庭◎地方の子守歌 五八八
火事のいましめ 六五八
西鄕先生父母の家庭◎紅定氏の商道◎辨天の
安子姉樣◎甘藷料理◎當今の臺所 六六一
體逸團欒 七三三
水の恩かへし難し◎土藏の火の用心◎大掃除 七三五

小話二則(治家の貝箴◎一商人商政) 七三六
園者家を破る 七三七
家政にも亦術數をゆるさず 八〇五
冬の旦の床ばなれ(よし子) 八〇七
主婦外に出で丶働くべき乎(長汀) 八〇八
家政の工夫(かも子)(裁縫の工夫◎料理の工夫◎家政百般の工夫) 八一一
留守中の電信と郵便◎角窖衛生園◎犯罪に關する家庭教育の影響 八一三

◎女學

領蚕たる室家の女學
決死の覺悟
婦人の論功行賞に際して 彼万里倉兵站病院の七女史を憶ふ 五〇
女學校の育兒科◎一家の仕方◎年頭禮儀廢る 五二
孤女學院名稱を改む 五四
女學研究會の創立を望む 一二三
園藝の家庭に及ぼす感化 一二四
作文の教授 一二五
東京下等社會の一瞥(布川靜淵) 一二七
本邦高等女學校の程度(成瀬仁藏) 一二八
米國に留學せし最初の日本婦人 二〇二
女學生の健康 二〇四
女學校に實益ありや 二一〇
卒業の女學生に告ぐ(青柳猛) 二七八
女子就學を增加せしむる方案 二七九
町村内の鑛蚕 二八一
方今女學界の一戒心事(曲浦子)(同)(四百四十二號)三二六
(卑劣なる女子教育者) 三二九
小學女教員の需要◎女子高等師範學校保姆練習科◎大阪市の慈善事業◎女子の就學◎大奥の服裝(同) 三三二
高等女子教育の必要を論じて併て其反對說に答ふ(成瀬仁藏) 三九四
女學生の集合 三九八
情死の辨◎情死統計(無識庵主人) 四〇〇
兒童研究 四六八
男女の氣質 四六九
大奥の朝夕◎臺灣新設女學校の状況◎白知教育の語に對する評 四七二
日本女子大學校の組織并に大阪に設立する理由(成瀬仁藏) 五四九
貞婦を論ず(鷗村子) 五五二
各地女風俗の報告を求む(一名婦人社會學の研究に就きて) 六二五
穆山大禪師の母堂鬼婆 六二七
比丘尼に就て(ちやうてい) 六二九
クロンダイク金坑の發見と米國婦人◎西京女の勞働◎夫婦の下宿住居 六三三
女子高等教育の是非 六九五
長子の教育 六九七
各地女風俗報告集(第一)(余の調査せしもの(A、B、生)) 六九八
佛教徒の婦人會(一) 七〇二
家庭試驗場 七六七
各地工女状態(其一) 七七〇
各地女風俗報告集(第二)(各地民俗の頽廢(C、D、生)) 七七四
佛教徒の婦人會(二) 七七七
主婦の自殺(曲浦)(滔々たる天下其妻を殺すの男子多し) 八四八
女學校の紀念日 八五二
各地女工の状態(其二) 八五三
幼兒健康の状態 八五六

◎評論

政治譚(如雲散士) 五五
小說家を論ず(鷗村子) 一四三
亦誰をか責めん 二二〇
西郷南州と勝海舟(上)落花淡人 二八二
花の西行(鷗村) 二八六
本佐錄を讀む(落花淡人)(四百四十二號)三三七
人心萎靡 三九一
西郷南州と勝海舟(下)落花淡人 四七五
唯信是唯樂(落花淡人) 五六五
基督教界の時論 六二〇
役人根性 六九三
慨世夜話 七七八
大悟の辨 八四四

◎講義

正月の遊戯 五
炭と薪(曲浦子) 一〇六
雛まつり(長汀子) 一八〇
雛の孵化(小農夫) 二三九
茶の話 (同)(四百四十一號)三三一
豆腐の話(郭北耕夫) 三七一
氷の話(鴨村耕夫) 四三九
夫婦あるものの營養作用(上) 五一九
同(中) 五九〇
同(下) 六六四
菊の話(曲浦) 七四〇
兒童の神學思想(久律見息忠) 八一六

◎教育

今の武育 五八
教育家其職を重んぜず(曲浦) 小楠好弟子なし◎哲僧祐天の恩師◎福翁氣品と下品とを說く◎俗を卑むは大俗なり◎教育學の害◎教育雜誌◎帝國教育會、高等教育會跡◎北海道同教育會◎米國兒童研究◎大坂溥愛社の教育 五九
朝鮮國の教育 六二
京城學堂報告◎朝鮮國に於ける英米佛教育傳道 一三三
事業一斑◎朝鮮官立學校概況 一三三

宣教師派學校を見ると如何(鷗村) 二一一
教育論者出でよ◎教科書採用運動の醜聞◎審の教育界◎井上哲二郎氏の非世界主義◎教育界の墮落◎教育家の問題◎小學校長の地位 二一三
普通教育に於ける宗教 二九〇
現今の小學教育(曲浦子) 二九二
教科書に就て◎教育雜誌◎皆惑へり◎小學校の優等生◎小學校は半ば遊戲場なり◎留學生の話 二九三
世上巨惡の責任 四百四十二號)三三九
教育界時評(丶丶生) (同) 三四〇
(教育上の飢饉◎万國學生大會◎日本主義◎教育界の腐敗◎教育界の紛亂事件◎教員の反抗◎野心家◎諸學校教員の狀態◎故西村正三郎氏を思ふ)
一國の文政 四〇五
內地雜居後の國民教育(曲浦) 四〇六
國家說の弊害に至る矣◎忠義心の弊◎無益なる忠義愛國と教育◎新士風、舊士風◎三陸地方海嘯後の教育狀況 四〇九
上杉鷹山公の教育(曲浦) 四八二
薩摩隼人の教育法◎帝國大學の組織◎京都大學の開設◎外國語の直用◎臺灣人の教育修養◎小學教員の補充 四八七
年少なる國家(曲浦) 五六七
帝國大學卒業生の官選志望口◎六年間の帝國大學各分科卒業生◎紳士の隱藝◎學校の衛生◎教育不振の罪◎學田の寄附◎塗擦及琉球の國性化◎世界主義と國家主義 五六九
天才と凡才(青柳有美) 六三三
天才に就て◎教育家の獨立◎亂調子◎外國語の流行◎沖繩島の教育 六三七
教育者の所實所學いかん 七〇三
明眼大師の教育 七〇五
京城學堂報告◎教育閥◎迷路彷徨◎二の教育大會◎海外教育界近況 七〇六
教育者慨然として任ぜよ 七八三
伊藤侯の教育談◎秋田縣の留學生規則◎秋田山形二縣の學事及女學◎小學校女生徒中途退學の原因併に救濟法◎慶應義塾◎海外教育界 七八五
教育家の獨立(長汀) 八五七
米國に於ける白知學校の現況◎エルウイン白知學校の景況◎官學的教育家◎湯武居士に質す◎氣質鍛練に關する調査 八五九

◎史傳

史料散錄(一)如雲 一一九
同 (二)同 一〇三
同 (三)同 一八六
櫻のかげ懷古(山下石翁) 二六五
齊彬公と西鄉南洲(如雲散史) 四五〇
小野小町を評論す(三輪田眞佐子) 五一六
白知教育の開祖エドワード、セグイン(櫻井鷗村) 五九四
無傳の傳 六七六
今昔夜話(山下石翁) 七四五

◎文藝

文藝の道(山下石翁) 二三
小說家と同情(鷗村) 九七
(一葉全集を讀む)
和歌(池袋清風)
琴の話(曲浦子) 一七一
(高野繁氏を訪ふ)
和歌 池袋清風 ◎花園の若草 一七五
題詠題作◎案山子酒舍諸社中詠草評點 (池袋清風) 二六九
案山子酒舍諸社中詠草評點 (四百四十一號)三三八
手紙の認めやう(かもめ) 三六五
小學生徒裁縫教授法新案(小出新二郎氏創見) 四四三
案山子酒舍社點取會詠評點(池袋清風) 四四五
評釋夏の雨(上田秋成の文一節) 四四七
評釋海の上(枕草紙の一節)長汀子 五二五
琵琶子の作文苦心談 五二七
文雅のたしなみ(長汀) 六〇三
謠曲評釋砧の聲(曲浦) 六〇四
書道の心得 六七〇
案山子酒舍社默所會詠評點(池袋清風) 六七二
女子武道の極意 七四七
戲曲評釋葛の葉子別れ(かもめ子) 七四八
文武達道談(曲浦子) 八二二

◎兒鑑

雪崩(さち子譯) 二五
思ひ出草(さち子) 二五一
牛坊主 三七六
落栗(かもめ子) 六七四
紅葉のにしき(よし子) 七五一
二人の朋友(さくら子) 八二四

◎隨感

新しきものは何事ぞ◎日輪の影、人情の色◎死躰診斷◎其眠るや一なり◎家庭の大勢◎卒鴻章◎戀愛◎伉儷の主旨快樂に非ず 三四
新年を馬鹿にすべからず◎老人を馬鹿にすべからず◎馬鹿らしき人を馬鹿にすべからず◎製氷家中川翁◎文の辭に讀ます相に讀む 七六
迎護の圖に題す◎人心の機轉◎去年今夜とは何ものぞ◎人智本來兒戲に非ずや◎かたみこそ今はあだなれ◎御大赦◎造り花 一一四
維新以來三十年◎女學の爲に殷鑑あり◎天の使那邊にある◎機勢旣に轉じたり◎韜晦先生◎大美は大醜の如し◎奇跡及妖怪◎戀愛の數奇ひの御手◎堅信者の末期 一七六
美なる實行の活例其二(一救世軍士)◎薩摩琵琶城山の曲 二一五
花の春の辭◎幽靈を如何せん 二五五

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎開くとの樂◎誤解邪推なきもの何處に在りや
◎海舟先生得意の感話◎名僧家政を訓す◎本
多家維新前の施藥 二八八
大勢の人◎官祿 三四六
言花開落（四百四十一號） 三一五
馬丁報分（四百四十二號） 三六二
古橋水頭の螢◎暗き夜の月見草◎稚心何ぞ久
しかりし◎老月晩く徘徊す◎大虚の虚◎虚無
さ生々さ 四二〇
懷疑を飾るものあり◎某子の墓に題す◎眞面
目の衝突◎誤解は人の事のみに非ず◎うろさ
し/\◎福翁と若翁◎名醫は神に視る 四五三
祇王祇女佛のさきり（上） 四七七
祇王祇女佛のさきり（下）◎山花われを待ちぬ
◎征衣を盂蘭盆に染む◎幽明一家の交 五五七
親さしての美◎聖賢の教何處にある◎宗教的
同情なきの寂寥◎赤兒の履歷 六三九
人才登用◎心外無別法◎親の慈愛◎皆佛性あ
り◎鑑拜の主旨◎思ふだに懷かしき 六六七
無用の勞苦◎理は務を待ちて明けし◎無念無
想◎古人と交はらんとする時◎天父行ひ玉ふ
の跡◎琵琶行◎湖上詩人の嘆 七一〇
學を誤り易きの歎◎實に無常なり◎月夜の感
謝 七五三
秋の垂示◎紅葉のいのち◎氷川清話◎死を決
して氷の如し◎万事不成須貴苦志◎墨州左圓
治の發樂◎自ら價値なしといふ◎さびしき 七八七
人の又もあれなら◎微笑靜默の友
人互に羨む◎愛の神祕◎人生これ賽の河原◎
さびしき妻に告ぐ◎天地各樣の景色 八二八
明治三十年 八六二
南遊行（舟航人生に似たり◎齋中の文、口頭
の吟◎交通は同情なり◎吏德何かあらん◎支
那人◎歲暮文虫子を追ふ） 八六三

◎雜錄

天賜の端に題す（長汀） 二七
言を某地の原師に寄す 二八
りんきさいさめ、お世辭のいひ方（よ代女） 三〇
海士をさめ（新體詩）花影◎ふろな雪（新體詩） 三二
若松賤子の答譯（櫻井鷗村） 六七
某子に與ふるの書（青柳有美） 七〇
轉變（おうそむ） 七三
同夫子（さよ子） 一一二
片々錄 一一三
巖本嘉志子君の靈に告ぐ（湯谷磋一郎） 一四七

輓詩一首（中島俊子） 一四八
妙諦偶語（曲浦子） 一四九
（妙は至微の際に在り◎寡言動節の妙）
小說磯馴松（上）紫琴女史 一五〇
片々錄（二） 一五五
小說磯馴松（下）紫琴女史 一八八
片々錄（三）◎女護島の風俗◎談話二則 一九三
故博士ハーツホルン氏青山墓地の詩 二二二
下層の社會（一賤生） 二二二
（木賃宿の金、殿玉樓◎怪の男女◎井戸屋人足）
刺ある蝶一婦人の悲しき日記文◎和歌（池袋
清風◎花園女史） 二三一
經驗は事物の境を越えざる事あり（曲浦子） 二五八
人力車夫（一車夫） 二六〇
古事斷片（一）長汀 二六四
蜘蛛、蜂、少女〇鑛毒被害地の人々に代りてよ
める（新體詩）泡鳴子 二九六
立ん坊（一賤夫） 三〇〇
花影小談（長汀）
（逢藝の妙◎花の下ハ俗物◎人を見るの遠近さ大小） 三〇五
祝歌（有美）◎古事斷片◎（二）案山子鄙舍諸社
中詠草評點（池袋清風） 三〇七
印度女傑ラマバイ女史大饑饉遭難の實歷談（四百四十一號） 三三九
古事斷片（三）◎春日野遊（告天子〇此處彼處）
大塚楠緒（同） 三四五
寫眞（新體詩）花影◎こがれの指輪（泡鳴子）◎
話の種（長汀）（四百四十二號） 三四三
護の天使◎紡績女の嘆、すみれ（新體詩）花影子 三八〇
着英後の安子てつ子（通信） 三八三
驕婦を哀む（鷗村） 四一一
樻蔭茶話（星野巴聲）
（きつれ橋◎おいぬさま◎松風蘿月） 四一六
明治四年岩倉大使一行歐米回覽瑣談 四一九
あはれ老媼（有美記） 四五五
悲歌（花影子）◎京都婦人の迷信◎森有禮の婚
姻證書 四五八
海舟先生詠草 四九〇
御身代り（鷗村） 四九一
今様夫婦氣質（上）紫琴女史 四九四
氷の話（二）鷗村耕夫 四六九
草刈の休憩の圖に題す（鷗） 五二八
今様夫婦氣質（下）紫琴女史 五二九
容貌婦人の如し◎泥舟空拳槍道を演ず◎幼兒
（新體詩）花影◎各地方の子守歌 五三一
逗子のやれ具（志なん山人） 五七一
海士の刈藻（長汀） 五七三

（鎌倉の里◎六代御前の墓を吊ふ）
撰集抄を讀む（蕉雨生） 六〇七
撰集抄ぬきほ◎古寺、白菊、友を懷ふ、須磨の
浦（花影） 六一一
海舟翁茶話 六四二
僞善者（上）レナルド及ゲルツルードの一節
（曲浦抄譯） 六四四
栗津の原、我やすみ（花影） 六四七
案山子鄙舍點取會詠評點（池袋清風）◎小兒の
歌謠 六四八
細民の狀態 六七七
僞善者（下）曲浦抄譯 六八二
新窓偶語（なにがし） 六八四
（緩急の手心◎毒を救ふに毒を以てす）
幸田女史西樂談（青柳有美） 七一三
月にむかひて（大塚楠緒子） 七一九
天津つかひにならまほし（新體詩）花影 七二一
虫のかごさ（鬮たけ）◎甘藷料理 七二三
海舟翁近詠◎陸奥だより（上）奧よしの女 七五六
入相の鐘ゑさき（鷗） 七五八
冬季の美食品◎甘藷料理 七五九
本阿彌妙秀尼の逸事談 七九〇
山あそび（馨泉女） 七九四
露伴子の「ひげ男」（霞山）◎白馬會瞥見
（好誉生） 七九六
靜？動？（馬陵） 八三一
婦人の外交家（岡田竹溪） 八三二
我が日の本（新體詩）しなん◎歸郷雜賦
（巖本琴城） 八三四
右大臣實朝（おうそむ） 八六七
鑛山雜詠（巖本琴城） 八七〇

◎時文

新刊書 百五十三種

◎片々◎時報

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎社告

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるると數十回、一代の流行を左右して一時少年の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣わり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀み去り讀來るうち讀者亦自ら化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるると切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畵を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

鈴木弘恭大人講述

第六版

百人一首講義

本書の講義の甚だ叮嚀親切なる、又其釘裝の頗る清楚なるは世上既に公評ある處にして、版を重ぬると、亦六回に及へり。小倉山莊の障子に、百人一首を撰書して、幽寂を味はへりし定家黄門の樂趣を知らんとせば、此講義に就くに若くはなけん。

附錄　小倉のてびき

正價金廿八錢郵稅四錢

櫻井成明譯

希臘孝子 腓立比物語

正價金二十八錢
郵稅金六錢

若松しづ子　英文集

巖本嘉志子

正價金六十錢
郵稅金六錢

布川靜淵　小比木秀野　合著

俳諧史傳

正價金二十七錢
郵稅金四錢

池袋清風大人著

淺瀨の波

第一篇正價二十八錢
第二篇同
郵稅一篇每ニ金四錢

☞◎クリスマス及び新年贈物に適す☞

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY